

# 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1986年度

1987年3月

柏原市教育委員会

## は　し　が　き

柏原市が独自に埋蔵文化財の発掘調査を実施するようになつて、8年目に入ろうとしています。調査が市民のみなさんの目にふれる機会も増え、作業をのぞきにこられることもあります。そんな時、多くの方が「高価なものや珍しいものは出ませんか。」とおっしゃいます。新聞紙上を賑わせる発見には「最古」「最大」「最高級」がつきものである為、一般の方の興味がそこにあることは否定しません。美しい物、立派な物に憧れるのは当然のことと言えましょう。しかし、とりたてて美しさ、珍しさのない日常的な遺物、遺構にこそ、太古の人々の息づかいを感じ、その生活、心に近づくことができるのではないかでしょうか。

ごく普通の物に対して愛情を持ち、いとおしむこと。それは本来、過去の物にだけなく、現在、未来の物に対して示すべき姿勢です。そして身近な文化的遺産、自然、生活、人間に対して愛着、愛情を持ち続け、その大切さを未來まで伝えることが、今に生きる我々の責務であると考えます。この柏原の地にいつまでも若葉が萌え、育まれる人間がより人間らしく豊かにならんことを願ってやみません。

1987年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が国庫補助事業（総額 4,500,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、北野 重、安村俊史、桑野一幸、田中 久雄、石田成年を担当者とし、昭和61年4月1日に着手し、昭和62年3月31日に終了した。
3. 本書には、文化財保護法第57条の2に基づく届け出があった175件のうち、昭和61年1月1日から12月31日までに着手した、土木工事等に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施にあたっては下記の諸氏の参加、協力があった。

石田 博	寺川 欽	谷口京子	西村 威	松下 修	仲井光代
秋田大介	伊藤芳匡	稻岡利彦	今中太郎	清瀧健二	西 一晃
近藤康司	麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩治郎	奥野 清	奥野義夫
川端長三郎	谷口鉄治	西岡武重	分才春信	道賀其藏	森口喜信
山田貞一	竹下彰子	江波佐知子	中田ゆかり	西口理加	福本理香
藤本直美	松村富子	戸中優香	岡西万里子	飯村邦子	近藤智代
竹下真紀	乃一敏恵	松成早苗	村口ゆき子	横関勢津子	吉居豊子
近藤友利	高橋 工	出口美佐子	本多富子	(順不同・敬称略)	

5. 本書の執筆はそれぞれの担当者が、監修は竹下が担当した。
6. 本書で使用した標高は T.P.、方位は注記のない限り磁北を示す。
7. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライド、ビデオテープを作製した。広く利用されることを願う。また、出土遺物は、写真、実測図と共に当市教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行なっている。

# 目 次

は し が き

例 言

目 次

1986年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧 (国庫補助事業)

1986年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

第1章 大県遺跡 .....	1
86-1次調査 .....	1
86-2次調査 .....	11
86-5次調査 .....	14
第2章 平尾山古墳群 .....	16
86-3次調査 .....	16
第3章 安福寺横穴群 .....	19
86-1次調査 .....	19
第4章 田辺遺跡 .....	36
86-5次調査 .....	36
86-6次調査 .....	38
86-7次調査 .....	40
第5章 国分尼寺跡 .....	42
86-2次調査 .....	42
付 章 船橋遺跡 .....	44

図 版

# 1986年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

(国庫補助事業)

## 柏原地区

遺跡名	所在地	面積	申請者	用途	担当	調査期日	備考
大堀86-1	平野2丁目325	427.28	中野 清	個人住宅建設	北野	1・7～1・18	本書1ページ
大堀86-2	平野2丁目271	305.82	谷口 稔英	*	北野	1・20～1・24	本書11ページ
大堀86-3	大堀4丁目184	294.21	上田 義佑	*	田中	2・17～2・29	2×2mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
大堀86-4	平野2丁目307-7	32.90	寺 駿治	*	桑野	2・27	2×2mトレンチ設定 遺構・遺物なし
大堀86-5	平野2丁目347-3	103.84	小野 順司	*	石川	5・26～5・31	本書14ページ
平尾山86-3	平野2丁目235-1	3,228.67	寛道葉之助	*	石川	6・2～6・12	本書16ページ
平野86-1	平野2丁目369-2	86.81	安田 成克	ガレージ・倉庫建設	石川	6・13	2×2mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
安亞86-1	安亞町23	152.21	田中 崇	個人住宅建設	石川	6・16～6・20	2×5mのトレンチ設定 弥生～中世の遺物出土
本郷86-1	本郷4丁目107-1	1,073.56	出井鶴治郎	集合作住宅建設	石川	10・16	3ヶ所の試掘トレンチ 遺構・遺物なし

## 国分地区

遺跡名	所在地	面積	申請者	用途	担当	調査期日	備考
田辺86-1	田辺1丁目2097-1	74.32	松木村紅毛櫟	個人住宅建設	桑野	3・12～3・13	2×5mのトレンチ設定 土師器須恵器若干出土
五丁村竜寺86-1	越ヶ丘3丁目369-54	102.20	三谷 健一	*	石川	4・5～4・12	2×5mのトレンチ設定 奈良時代の瓦出土
五丁村竜寺86-2	越ヶ丘2丁目369-54	102.20	八草祐業	*	石川	4・5～4・6	2×2mのトレンチ設定 奈良時代の瓦出土
原山86-1	越ヶ丘3丁目1084-1	81.58	山田 説治	*	北野	6・18	2×2mトレンチ設定
安福寺外東棲穴86-1	玉手町207		安福寺	史跡復旧変更	桑野	6・23～8・31	本書19ページ
田辺86-2	田辺2丁目1231-37	119.29	宮崎 千一	個人住宅建設	北野	6・25～6・26	2×5mのトレンチ設定 奈良時代のビット繊維
田辺86-3	田辺1丁目2093-3	159.19	徳川 和彦	*	石川	7・14	4×7mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
玉手山86-1	越ヶ丘1丁目464-6	225.07	藤野 浩平	*	石川	7・22	2×4mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
田辺86-4	田辺1丁目2049-1	125.35	西川 幸樹	*	石川	7・24～7・25	2×5mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
田辺86-5	田辺本町6丁目1482	373.52	吉村 景次	*	石川	9・25～9・27	本書36ページ
国分尼寺86-2	国分尼寺町2577-1	295.73	森田 悅	*	石川	10・15～10・14	本書42ページ
田辺86-6	田辺2丁目1231	169.79	西野 朝美	*	安村	11・17～11・19	本書38ページ
田辺86-7	田辺2丁目2-28	154.07	渡邊 武道	*	安村	11・18～11・19	本書40ページ
玉手山86-2	玉手町134	146.79	大西 文明	寺院建設	北野	11・25～11・27	9×13mのトレンチ設定 遺構・遺物なし

この一覧表には昭和61年度国庫補助事業として計画、実施した発掘調査のうち、昭和61年1月1日～12月31日の間に着手したものを探載している。

## 1986年度 柏原市内遺跡群立会調査一覧

### 柏原地区

遺跡名	所 在 地	面 積	申 請 者	用 途	担当	調査期日	備 考
船 横 通	上市2丁目559番3地先	64.81	近畿日本鉄道(株) 天王寺事業部技術 部木工課	橋脚根固め補修工事	田 中	2・10 ～2・12	相教文60、3-72 遺物・遺構なし
・	吉町3丁目	255.00	大阪府八尾土木 事務所	法面盛土にともなう 法尻のブロック積	北 野	4・12	相教文3-11 遺物・遺構なし
・	大正1丁目662-1の一部	368.79	田中 千二	分譲住宅建設	北 野	5・23	相教文60、3-47 遺物・遺構なし
・	吉町1丁目595-7	87.36	文野 克也	個人住宅建設	北 野	6・12	相教文3-23 遺物・遺構なし
・	吉町3丁目474-1	555.70	カネコ石油(株)	給油所増築工事	石 川	7・21	相教文3-26 遺物・遺構なし
本 郡 通	本郷4丁目245-15及び-16	330.57	乾 正幸	個人住宅建設	北 野	6・11	相教文3-22 遺物・遺構なし
・	本郷3丁目860番地	60.88	松本 真由	個人住宅建設	北 野	7・19	相教文3-28 遺物・遺構なし
・	本郷4丁目257-7,258-4	116.19	榎本 英勝・悦子	個人住宅建設	北 野	12・18	相教文3-43 遺物・遺構なし
安 宮 通	安室町662-3,953-1	436.30	西本 亮介・西本 亮樹・賀津子	賃借住宅建設	桑 野	1・8	相教文60、3-17 遺物・遺構なし
太平寺通跡	太平寺2丁目545-5地1番	173.94	松下 順徳	個人住宅建設	北 野	4・18	相教文3-4,1×2のトレン チを設定。遺物・遺構なし
平尾山古墳群	平野2丁目3-1	0.64	関西電力(株) 羽曳野営業所	電柱建替	北 野	7・8	相教文3-27 遺物・遺構なし
・	大字青谷2073-1,2074	371.09	松本 梅造	個人住宅建設	北 野	7・30	相教文3-21 遺物・遺構なし
・	福多尾根351～1342-2	58.70	柏原市水道局	上水道管埋設	北 野	9・9	相教文3-22 遺物・遺構なし
・	福多尾根		関西電力(株) 羽曳野営業所	電柱新設	北 野	9・18	相教文3-51 遺物・遺構なし
法善寺発寺	法善寺3-905-2	234.84	大島 義尚	旅館所賃住宅建設	北 野	9・17	相教文3-41 遺物・遺構なし

## 国分地区

道路名	所 在 地	面 積	申 請 者	用 途	相 当	調査期日	備 考
王子山通路	円明町53-8	99.365	笠本 弘子	個人住宅建設	竹 下	2・7	柏教文3-3 遺物・遺構なし
+	円明町4947-1	798.30	大清謹設	倉庫新築	北 野	4・8	柏教文3-15 遺物・遺構なし
+	円明町4946-1	704.485	池川浅治郎	貨倉中新築	*	4・8	柏教文3-10 遺物・遺構なし
+	王子町145-70	96.302	乾木村仁志株	個人住宅建設	*	4・11	柏教文3-1 遺物・遺構なし
+	王子町115-61、62	626.30	益浦 正信	診療所建設	*	4・19	柏教文3-14 遺物・遺構なし
+	越ヶ丘2丁目876-1	550.26	松田 正信	個人住宅建設	*	7・14	柏教文3-24 遺物・遺構なし
+	越ヶ丘2丁目240-34	153.91	早川 健	*	*	9・3	柏教文3-37 遺物・遺構なし
+	王子町145-20 115-69-140-5	40.02	柏原市水道局	上水道管理設	*	9・3 - 9・12	柏教文3-34 遺物・遺構なし
+	円明町122、123	350.01	尾村 寿造	個人住宅建設	*	11・1	柏教文3-44 遺物・遺構なし
田辺通路	国分本町7丁目1955-40 1973-34、1980-11	100.200	日高 古行	*	*	4・9	柏教文3-6 遺物・遺構なし
+	田辺2丁目2013-13	131.21	橋松 伸三	*	*	4・14	柏教文60、3-66 遺物・遺構なし
+	国分本町6丁目1439番3	107.33	谷野 幸一	*	*	4・17	柏教文3-8 遺物・遺構なし
+	国分本町7丁目1358	297.82	川口エリ子	*	*	4・24	柏教文3-9 遺物・遺構なし
+	国分本町7丁目1955-41 1980-10	100.200	坂下健志夫	*	*	5・7	柏教文3-13 遺物・遺構なし
+	田辺2丁目2100-2	124.86	永井塗太郎	*	*	9・13	柏教文3-36 遺物・遺構なし
+	国分本町5丁目141583 1592-1590-4	111.2	柏原市水道局	上水道管理設	右 田	9・27 -10・6	柏教文3-35 遺物・遺構なし
川辺古墳群	国分市場1丁目3109-50	108.900	木戸 駿	個人住宅建設	北 野	4・25	柏教文3-12

# 第1章 大 県 遺 跡



図-1 大県遺跡調査地位置図

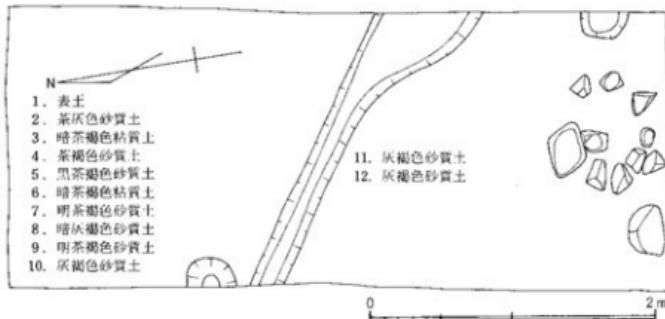
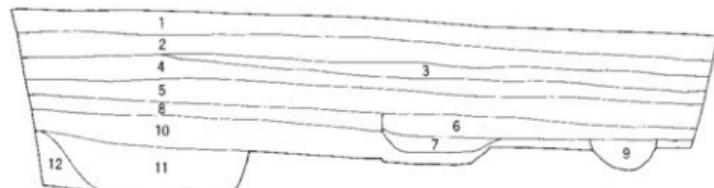
## 86-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目352番地
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1986年1月7日～1月18日
- ・調査面積 20m<sup>2</sup> / 427m<sup>2</sup>

当調査区は、大県遺跡の北側部分にあたり、生駒山地の麓でも標高の高い扇状地状台地に位置している。周辺部の調査では、調査区一帯にかけて多くの縄文時代の遺構と遺物を確認している。調査は、建物建築位置に2ヶ所のトレンチを設定した。

第1トレンチは、申請地の東側部に東西方向2m、南北方向5mを測る規模である。基本土層は、表土（1層）、茶灰色砂質土（2層）、暗茶褐色粘質土（3層）、茶褐色砂質土（4層）、黒茶褐色砂質土（5層）、暗灰褐色砂質土（8層）、灰褐色砂質土（10層）、灰褐色砂質土（11層）がある。5層までが古墳時代の遺物包含層であり、8層以下は縄文時代の遺物包含層である。

大縣遺跡



1. 表土  
2. 茶褐色粘質土  
3. 茶褐色粘質土  
4. 黑茶褐色粘質土  
5. 灰茶褐色砂質土  
6. 灰褐色砂質土  
7. 灰褐色砂質土  
8. 黑灰褐色粘質土  
9. 茶灰褐色砂質土  
10. 茶黃灰褐色砂質土

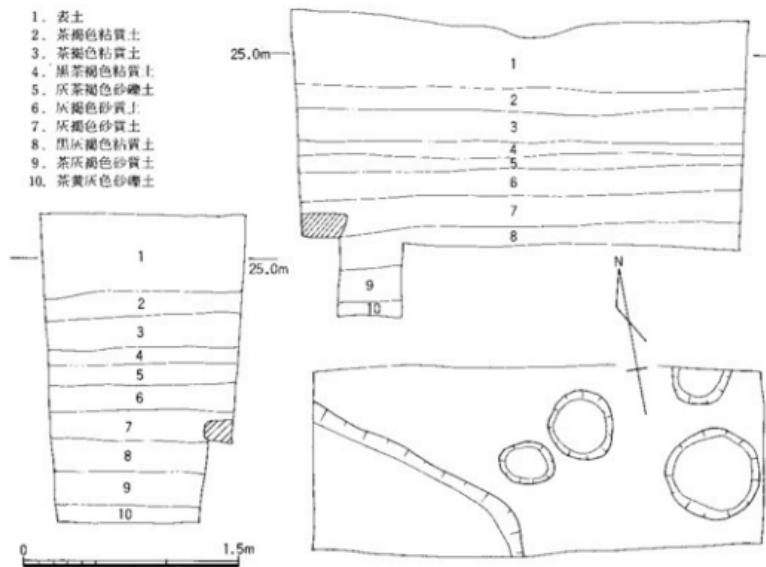


図-2 遺構図・断面図

遺構は、古墳時代中期の土器溜り、弥生時代後期の堅穴住居、縄文時代後期の石窓を検出した。土器溜りは、トレンチ南側の5層下層から検出した。土器は、ほとんど完形に近いものがかたまって出土した。土器は、壺、甕、高杯がある。

堅穴住居は、トレンチ南半分に、北側肩部だけを検出した。規模は不明であるが、方形の堅穴住居である。埋土は、暗茶褐色粘質土（6層）と明茶褐色砂質土（7層）である。端部には排水溝と考えられる溝があり、住居内側にピット1ヶを検出した。当住居は、床面上に住居肩と垂直方向の向きに倒れ込んだ炭化材を検出し、焼成によって廃絶した住居と考えられる。埋土及び床面上から多くの遺物が出土した。その中でも特徴的な点は、黄灰色粘土が出土した事である。人頭大の粘土塊が数個固まって出土し、表面は焼成を受け薄茶灰色に変色している。このような粘土塊の出土例は、東大阪市鬼塚遺跡にあり、土器製作用素材と考えられている。

石圓い造構は、10層の下層に検出した。10~20cm位の礫が径約1m弱の円形状に構成しており、礫表面が焼成を受け石圓い内底部の上層中に炭が混入していた。

第2トレンチは、第1トレンチの西側へ約25m離れた場所に設定した。規模は、東西3.2m、南北1.5mを測る小さなトレンチで、主に縄文時代の土層観察を主眼にした。基本土層は、表土（1層）、茶褐色粘質土（2層）、茶褐色粘質土（3層）、黒茶褐色粘質土（4層）、灰茶褐色砂礫土（5層）、灰褐色砂質土（6層）、灰褐色砂質土（7層）、黒灰褐色粘質土（8層）、茶灰褐色砂質土（9層）、茶黃灰色砂礫土（10層）がある。4、5層は、弥生時代から古墳時代までの遺物包含層である。10~20cm大的礫が非常に多く含んでいる。6層以下が縄文時代の遺物包含層である。6層は、3~8cm大的小石を少量含む。7層は、3cm以下と30cm前後の礫が割合含まれている。10層は、5~10cm大的礫を非常に多く含んでいる。

遺構は、6層除去後に落ち込みとピットを検出した。ピットは、径40~60cmの円形ピットである。遺物の破片も多く出土しており住居に関わるピットと考えられる。

出土遺物は、各トレンチの遺構及び遺物包含層から多数出土した。時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代のものがあり、順次説明を加えたい。

#### 縄文土器

第1トレンチの暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土中から多数の縄文土器の破片が出土した。1~4は、口縁端部直下に横方向あるいは縦方向に沈線を描く。「I縁部は、内湾気味に立ち上がり、端部は、肥厚して丸く終る。この端面は平坦で縄文を施す。5、6は、端部が平坦にし縄文を施す。口縁部外面には沈線がなく縄文が2条みられる。7は、口縁端部及び外面に細い縄文を施す。9は、口縁直下に沈線を巡らし、端部上面平坦部に竹管文を施す。沈線間に縄文帯と無文帯がある。10、11は、口縁端部がわずかに肥厚したいわゆる縁帶文土器である。12は、沈線と押型状の模様のみられる。器壁は、厚い。早期の土器かもしれない。13~17は、J字文を持つ中津式の体部破片である。16は、縄文帯部分に朱塗りがみられる。

大県遺跡

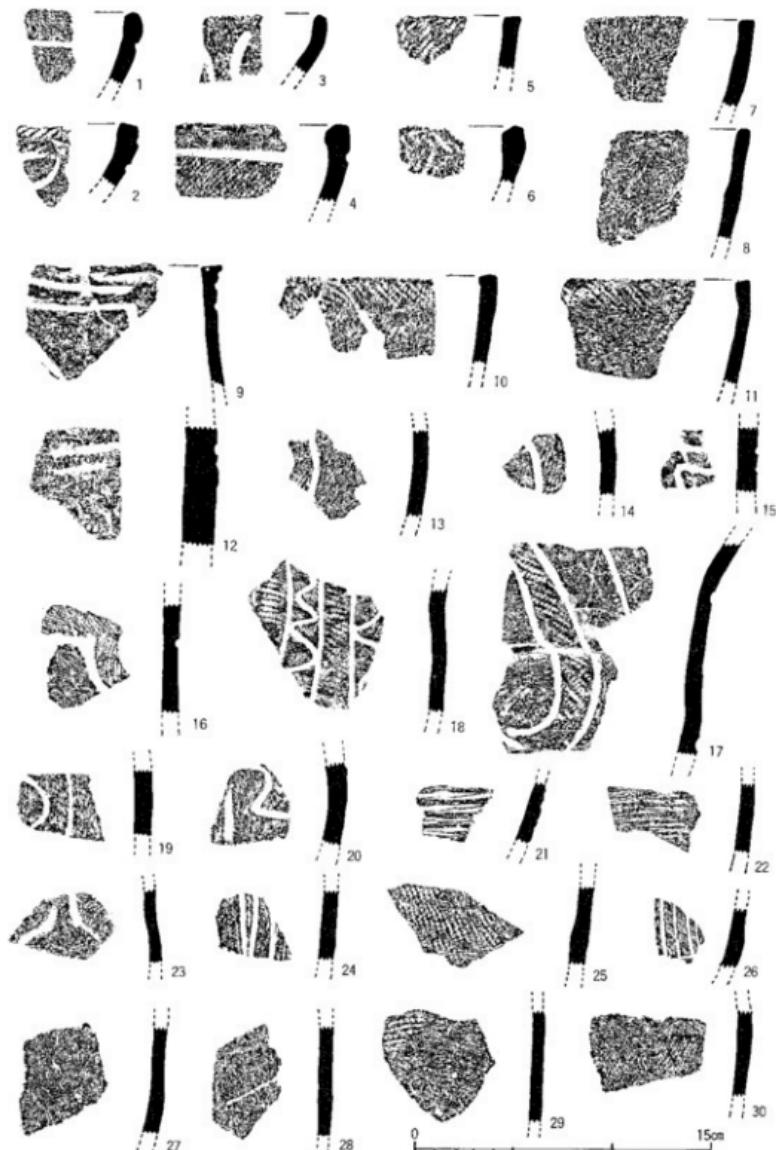


図-3 繩文土器実測図

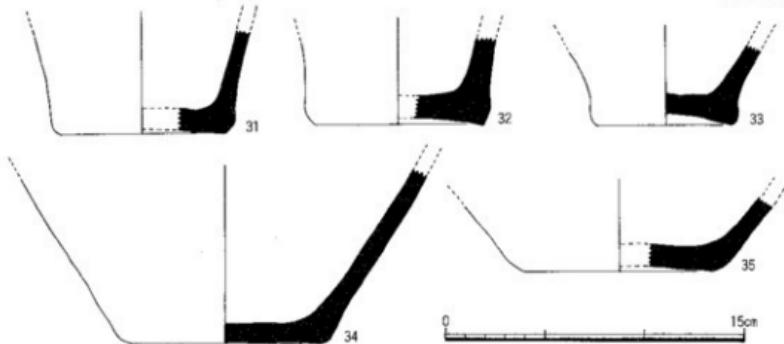


図-4 縄文土器実測図

18は、沈線間にS字文を持つ。胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含み、当地域産のものである。色調は、暗灰褐色を呈する。19、20、23は、沈線間に縄文帯を持たない破片である。21、22は、荒い条痕を施こしている。25は、外面を縄文、内面を貝殻又は繊維束による条痕を施す。24、26は、多条の沈線を持つ。26の沈線は、2本を単位としている。27、28、30は、細かい縄文を施す。

36は、口縁端部に刻目文を施し、端部内面直下に菱形の刺突痕を持つ。37は、逆くの字形に屈折した口縁部を持ち、多くの沈線が施されている。38は、口縁直下に2本の凸帶があり、その上と口縁端部に刻目を持つ。内外面縄文が施されている。39は、茶黄灰色砂礫土より出土した遺物で、凸型の押型文土器と考えられる。胎土は、石英、長石、角閃石を多く含む。40は、37と同一土層から出土し、深い沈線と貝殻条痕を持つ。41は、37と40と同一土層、42は36と同一土層中から出土した底部である。43、44は、口縁直下に沈線がある。45、46は、口縁端部内面が肥厚し、内傾する面を持ち、46は、不等間隔の刻目がある。外面は、45と同様やや荒い縄文を施す。47、48は、口縁と平行する沈線を持つ。49は、口縁端部が内側に肥厚し、内傾する面及び外面に荒い縄文が施されている。50~54は、沈線の描かれたものである。53、55は、50~54と同一土層から出土した。56は、内外面ヘラ磨きが施された鉢である。57、59は、口縁端部にも縄文が施されている。58は、細い沈線文である。

### 弥生土器

堅穴住居の床面から鉢、壺、甕、高杯、手焙型土器が出土した。

60は、小型の鉢である。口径14.2cm、器高7.1cmを測る。口縁部は、外上方に伸び、端部は尖がり気味に終る。胎土は、石英、長石、金雲母を含み、色調は、茶灰色である。底部は平底でねじり痕が底部付近にみられる。外面はナデ調整であるが、内面は板ナデ調整である。ねじり痕は、内面の調整時に付いたものであろう。61は、口径15.0cmの小型鉢である。口縁部は、外

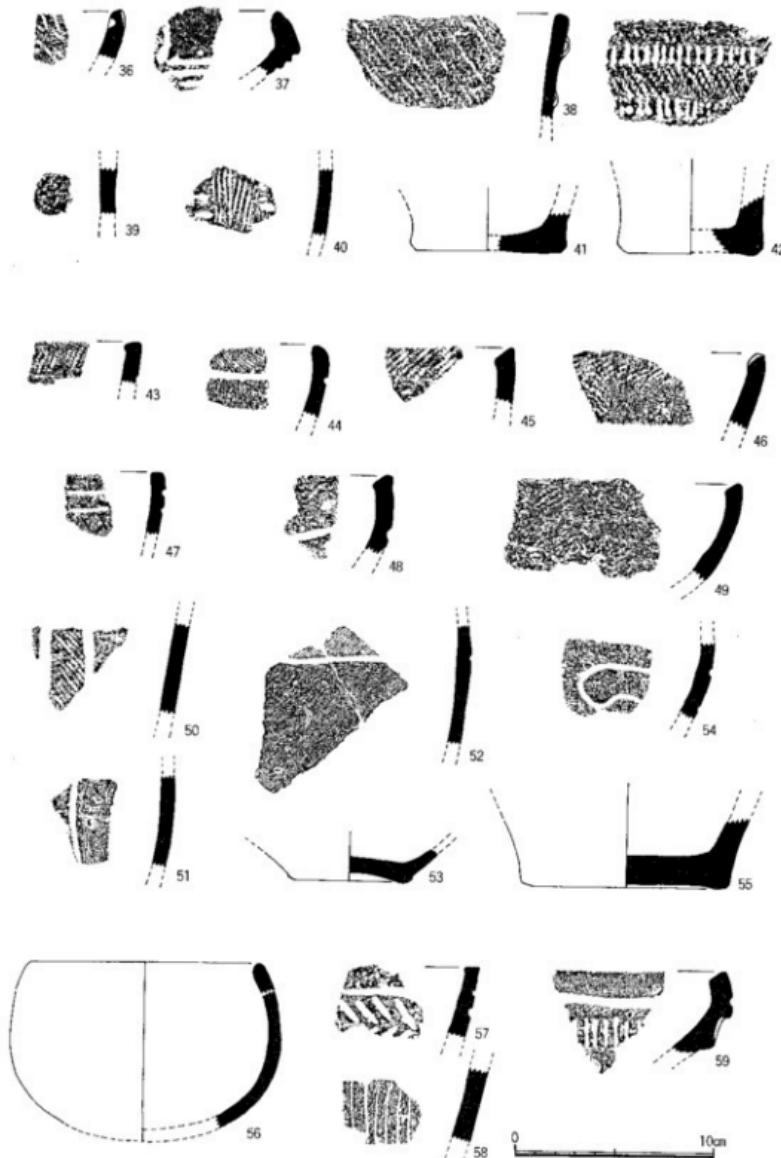


図-5 猿文土器実測図

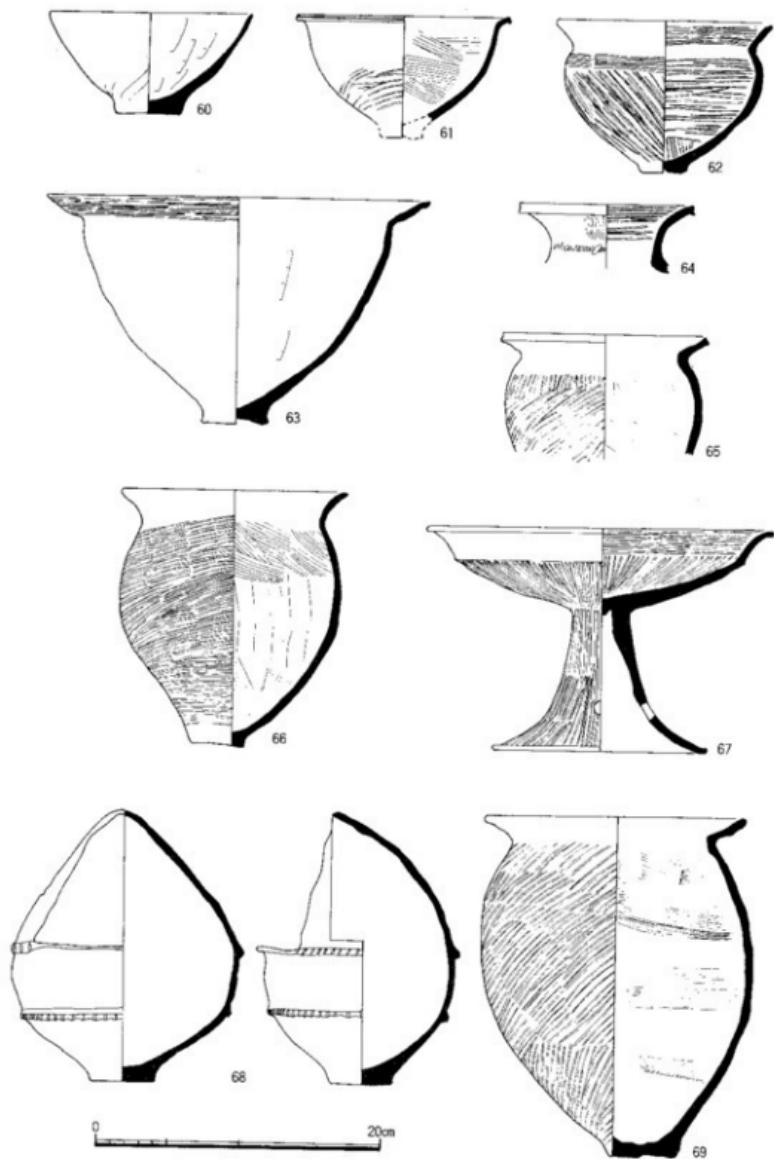


図-6 弥生土器実測図

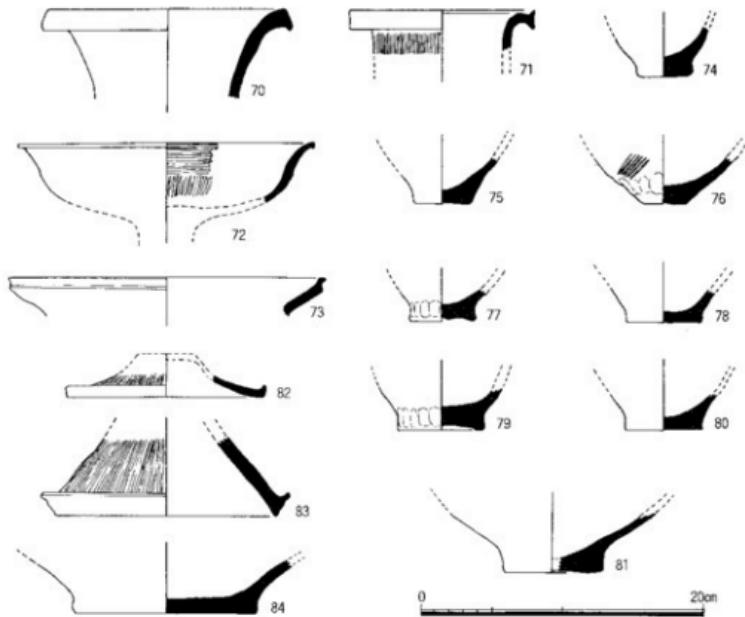


図-7 弥生土器実測図

上方に伸びた後短く外反する。口縁端部は、外下方に肥厚し、1条の沈線を巡らす。体部はやや深く弧状を呈す。調整は、体部下半は平行叩きがあり、上半部はナデ調整である。内面は、横方向の板ナデを施す。62は、口径15.1cm、器高10.6cmの平底鉢である。口縁部は、くの字形に折れ曲がり外方に伸び、端部は尖がり気味に終る。体部は、上方でよく肩が張り小さな底部を持つ。外面は、肩部付近は横方向に、肩部下半は斜上方向に密なヘラミガキを施す。胎土は、石英、長石、金雲母を含み当地産である。色調は、茶灰色である。63は、口径27.0cm、器高16.2cmの大型鉢である。口縁部は、くの字形に外反するもので端部は丸く終る。外面は、口縁部が横方向、体部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は、横方向の板ナデ調整である。胎土は、石英、長石、角閃石を含み、砂粒をやや多く含む。色調は、茶灰色を呈する。

64は、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端部は下方に小さくつまみ出している。口縁部の内外面は、密なヘラミガキを施す。口縁部と体部の境にはヘラミガキによってできた当り痕がみられる。胎土は、石英、長石、角閃石を多く含み、色調は、茶灰褐色を呈する。仕上げは丁寧である。65は、小型の壺である。口縁部は、大きく外反し、端部はやや角ばって終る。外面は、平行叩き調整で、内面は、平滑に板ナデ調整を行う。胎土は、石英、長石、角

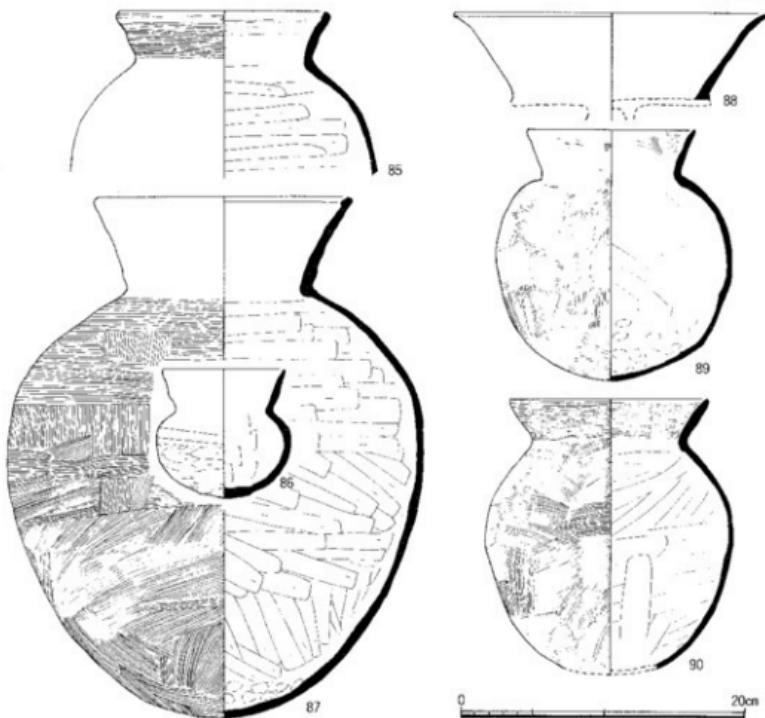


図-8 古墳時代土器実測図

閃石を含み、色調は、茶灰色を呈する。66と69は、甌である。口縁部は、くの字形を呈し、前者は外反、後者は内湾する。外面は、斜方向の平行叩きを施こし、内面は、横又は縦方向の板ナデ調整を施す。色調は、茶褐色を呈し、胎土は、石英、長石、角閃石を含む。

67は、ほぼ完形の高杯である。内外面密なヘラミガキを施こし、精良な作りである。脚部下方に円形透し孔が四穴穿かれている。68は、手焙形土器である。底部は、平底で、半球形の体部と三角錐状の天井部を持つ。口縁部と体部中位に2段の凸帯が巡り、この凸帯上に刻目が施されている。胎土は、石英、長石、角閃石を含み精良である。色調は、褐灰色を呈す。全体に二次焼成痕がみられる。

弥生土器は、第1・2トレーナーの黒茶褐色土中から細片であるが出土した。壺、高杯、蓋、と各種の底部類がある。中期に属するものと後期に属するものがあり、量的には後者が圧倒的に多い。胎土は、当地域産の粘土を使用しており、共伴した粘土塊と素性は同じである。

大原遺跡

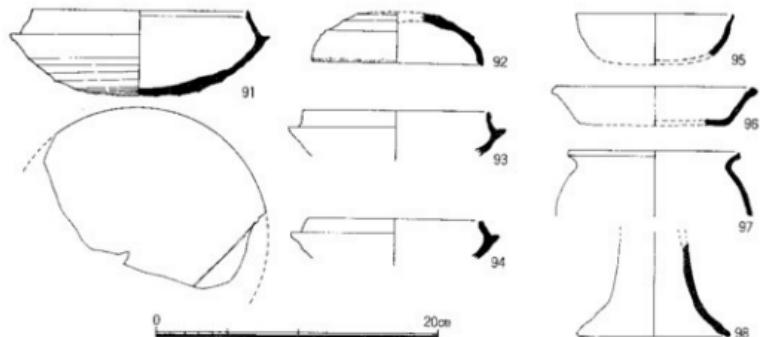


図-9 古墳時代土器実測図

古墳時代の土器

第1トレンチ土器溜りから一括性の高い土器が出土した。

85は、甕である。口縁部は外反気味に伸び、端部は内側にわずかな段を持つように肥厚する。調整は、内外面共に板ナデ調整である。口縁部内面と外面は、ハケ目状の板ナデである。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、灰褐色を呈す。86は、小型丸底壺である。口径8.6cm、器高9.2cmを測る。口縁部は、外上方に長く伸び端部は尖り氣味に終る。体部は、扁球形を成し、底部は、ごくわずかに平底状の痕跡が認められる。内外面板ナデ調整である。胎土は、石英、長石、角閃石を含み、色調は、褐灰色である。87は、大型の壺である。口縁部は長く直線上に伸び、端部は、内傾する面を持ち肥厚する。体部は、上方部に最大径があり肩がよく張った感じである。外面は、ハケ目調整、内面は、ヘラ削り調整である。胎土は、石英、長石、角閃石を含み、色調は、灰褐色を呈する。

88は、大型の高杯の杯部である。口縁部は八の字状に伸び、杯の底部に明瞭な段を持つ。内外面ナデ調整である。胎土は、石英、長石、角閃石を含む。89は、中型の壺である。口縁部は短く上方に伸び内傾する段を持つ。外面は、ハケ目、内面は、ヘラ削り調整である。内底面には、指頭圧痕がよくのこる。90は、中型の甕である。口縁部は、外上方に伸び体部器壁の約2倍の厚さである。胴部最大径は、やや上方にあり肩が張っている。外面は、ハケ目調整、内面は、ヘラ削り調整である。胎土は、石英、長石、角閃石を含み、当地域産の胎土である。

遺物包含層から出土した遺物は、6世紀代から奈良時代に至るまでのものがある。須恵器は、陶邑編II-3段階頃からIV型式までみられる。91は、底部にヘラ記号を持つ資料である。器種は、杯以外に壺や甕片もある。土師器は、須恵器と対応する時期のものと考えられ、器種は、杯、高杯、甕等が出土した。



図-10 大県遺跡86-2次調査区

## 86-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目271
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1986年1月20日～1月24日
- ・調査面積 12m<sup>2</sup> / 305m<sup>2</sup>

調査区中央部に2ヶ所のトレンチを設定した。第1トレンチは、調査区の東側部にあたり、約90cmで地山に達する。基本土層は、盛土（1層）、茶灰色砂質土（2層）、暗灰褐色砂礫土（3層）、茶灰褐色砂質土（4層）、茶褐色粘質土（5層）である。灰茶褐色砂質土（6層）は、多くの花崗岩を含み地山である。遺構は、隅丸方径のピット2ヶを検出した。ピットは、一辺約60cm、柱穴径約30cm、深さ50cmを測る。柱穴埋土中から楕円形津が出土した。第2トレンチは、第1トレンチの西側部に設定した。基本土層は、第1トレンチの5層まで同じく下層から、暗灰褐色粘質土（7層）、暗灰褐色砂質土（8層）、茶灰色砂礫土（9層）が堆積している。8、9層は、3～5、10～15cm大的の礫が多く含んでいる。

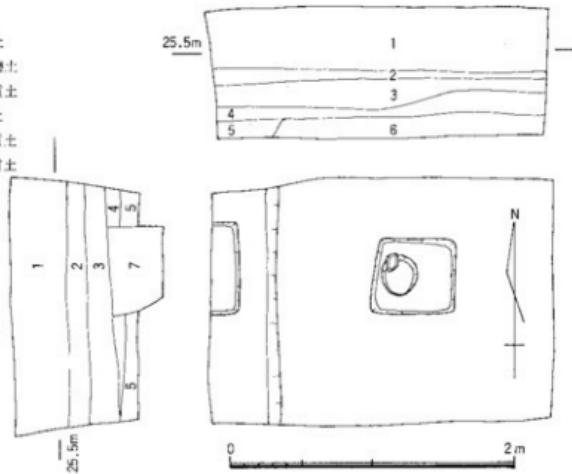
遺物は、ピット埋土中及び各遺物包含層から、土師器、須恵器、鉄滓、繩文土器が出土した。土師器や須恵器は細片のものが多い。時期は、7世紀代の遺物と考えられる。鉄滓は、大県遺跡から出土する最北端にある。

繩文土器が少量であるが出土した。若干の説明を加えたい。

1は、中津式の有文深鉢である。口縁波頂部分にあたり、端部は、外反後内湾気味に肥厚して終る。外面の施文は、やや太い沈線によって繩文帯と無文帯を区画し、波頂部直下にJ字文

大堀遺跡

1. 感土
2. 茶灰色砂質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 茶灰褐色砂質土
5. 茶褐色粘質土
6. 灰茶褐色砂質土
7. 暗灰褐色粘質土



1. 表土
2. 茶灰色砂質土
3. 晴灰褐色砂質土
4. 茶灰褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 灰茶褐色砂質土
7. 暗灰褐色粘質土
8. 暗灰褐色砂質土
9. 茶灰色砂礫土

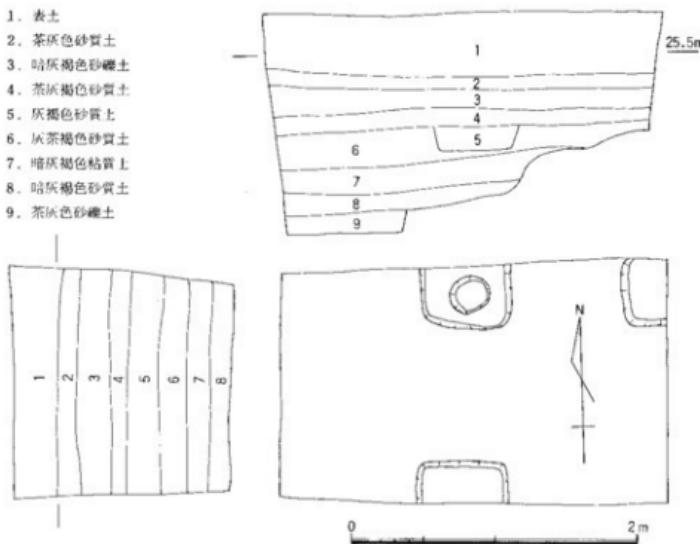


図-11 第1・2トレンチ平面図・断面図

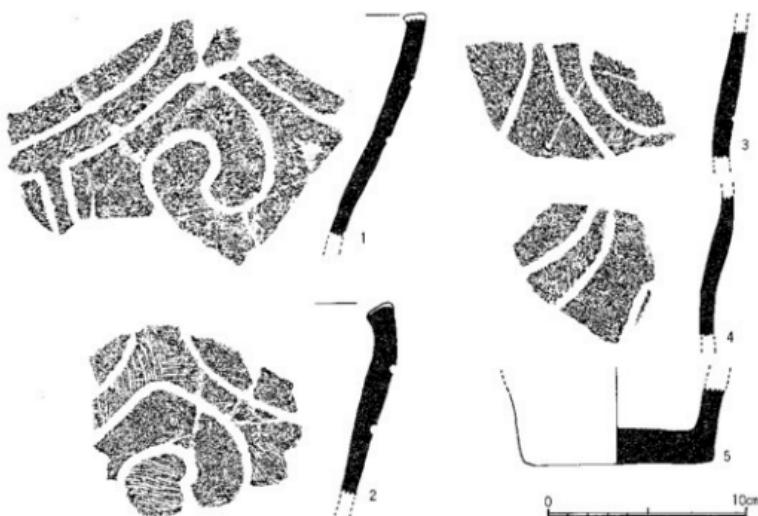


図-12 縄文土器実測図

が描かれ、全体に摩耗が激しい。縄文帯は、J字文の端部付近で小さく異方向に施こされており、沈線を描いた後に施文されていると考えられる。胎土は、石英、長石、金雲母を含み砂粒が多い。色調は、黒茶褐色を呈する。2は、1と同一個体と考えられるもので、有文精製深鉢の波頂部辺である。口縁部は、外反気味に拡がり端部は内湾して肥厚する。沈線で描かれるJ字文は、1の構成とほぼ同様である。口縁直下にある沈線は、口縁部と平行して波頂付近で口縁に接して終る。波頂端部中央には、沈線と同じ大きさの凹形の刻目がある。胎土は、1と同様である。色調は、茶褐色である。3は、同じく有文精製深鉢のくびれ部付近の破片である。沈線が三条みられ弧状に描かれる。縄文帯と無文帯が交瓦にあり、無文帯はヘラ状工具できれいにナデられている。内面は、横方向に平滑なナデ調整である。4は、3と同様胴部のくびれ部分である。5は、底径9.5cmを測る上述の有文精製深鉢の底部である。底部は平底で、器壁が厚い。体部は垂直方向に伸びている。内外面ナデ調整を施こし、胎土は、上述の土器とほぼ同一である。

今回の調査によって7世紀代の掘立柱建物が検出された。建物規模等詳細は不明であるが、楕円洋の出土があり、鐵治生産集団との関わりが注目される。縄文土器は、後期初頭に属する一群が出土した。当地域周辺は、縄文集落の中心付近と考えられる。

・大縣遺跡

86-5次調査

- ・調査地所在地 柏原市平野2丁目347-1・3
- ・調査期間 昭和61年5月26日～5月31日
- ・調査面積 20m<sup>2</sup> / 164m<sup>2</sup>
- ・調査担当者 石田成年

調査概要

当該地は生駒山地の山裾に形成された扇状地のほぼ中央部に位置する。微視的には高尾山から西に派生した尾根の西北斜面、標高約31mにある。平野地区の產土神である若倭彦神社が86-8次調査地をはさんで西に隣接する。

調査は調査地に東西8.5m、南北6.5mのL字形の調査区を設定、人力掘削により実施した。

南辺調査区においては現地表下約35cmで地山を



図-13 調査位置図(方位は真北)



図-14 調査区位置図

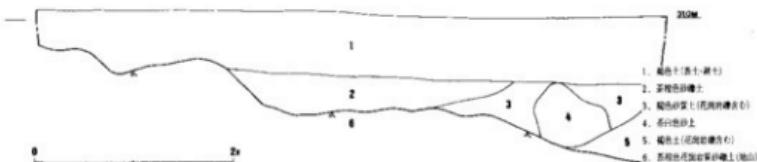


図-15 調査区西壁断面七層図

検出した。近世以前の遺構、遺物は認められず、葡萄畠の開墾によるものか、すでに大きく削平を受けているようである。西辺調査区においても遺構は認められなかった。付近住民の談によると、過去に北側水路の決壊があったとのことで、調査地西北30mのところには供養碑が建立されている。この碑には、昭和10年9月2日に調査地東600mの山中にある大池の堤が決壊し、付近住民9名が亡くなったことが記されている。表土、耕土以下の花崗岩礫を含む土層は、この決壊以後の堆積であると判断された。

遺物は何れの層からも出土があった。しかし、前述のような調査地の状況から、遺構に伴うものではなく、すべて細片であることからも混入堆積であると考えられる。出土遺物には須恵器、土師器、瓦器があるが図示するものはなかった。第5層出土の遺物の中に縄文土器片が2点あり、それのみ図示した。両片共、刻目凸帯を有するもので、口縁端部からやや下部に凸帯を配するものと、肩に凸帯を配するものとであり、縄文晩期のものとみられる。同じ第5層からは瓦器片も出土している。調査地東方の高所にこれらの時期の遺構の存在を予想できる。



図-16 出土遺物

## 第2章 平尾山古墳群

### 86-3次調査

- ・調査地所在地 柏原市平野2丁目235-1~3、233
- ・調査期間 1986年6月2日~6月12日
- ・調査面積 29m<sup>2</sup> / 3229m<sup>2</sup>
- ・調査担当者 石田成年

### 調査概要

当該地は高尾山から西に派生した尾根が扇状地に突出した南西部の突端にある。宮山渓と呼ばれる谷の谷口の北側であり、標高は41m前後を示す。

調査は建物建築予定地に東西2m、南北10mの調査区を設定、人力により掘削した。南半では現地表下約50cmで地山（橙白色花崗岩質砂礫土）を検出し、遺構は認められなかった。北半では現地表下70cmで須恵器、土師器高杯が数点、集積しており、周囲を精査したところ、何らかの遺構があると予測された為、調査区を東と北へ拡張した結果、溝状遺構を検出した。

遺構は東南から西北に流れれる溝とみられる。軸は調査区東南隅で130cmを測る。西北方向へは



図-17 調査地位置図(方位は真北)

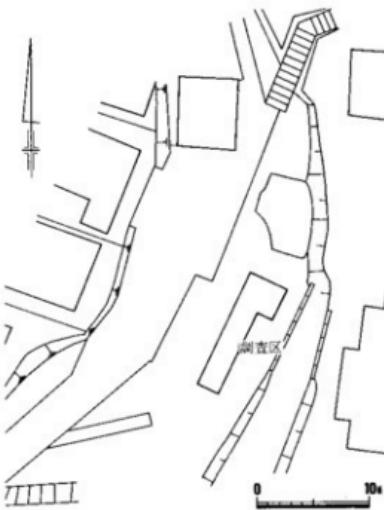


図-18 調査区位置図

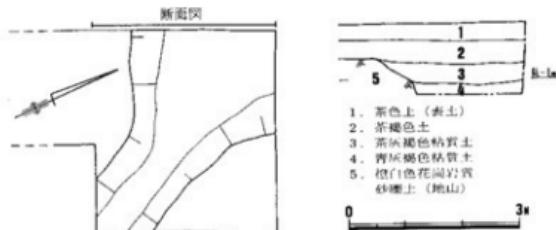


図-19 調査区北端平面図・土層図

ラッパ状に開いており、溝の上端はそれぞれ西と北へ向かっている。深さは現状で30~50cm程度である。埋土は第3層の茶灰褐色粘質土であり、遺物はすべてこの層からの出土である。その下層、第4層である青灰褐色粘質土は溝の西北部のみでみられたもので、東南部ではその堆積はみられなかった。溝底部にはおびただしい量の土師器高杯片、拳大~人頭大の花崗岩の堆積があった。遺物の出土状況から溝の上部は幾分削平を受けているようである。

出土遺物は須恵器、土師器がほとんどであり、実測できない細片には鱗羽口片、上釜等がある。須恵器は杯蓋（1~5）、杯身（6~10）の2種のみで、他の器種はみとめられない。杯蓋の口径は16.0~13.8cm、器高は4.6~3.4cmを測る。杯身の口径は13.2~11.2cm、最大径15.6~14.0cm、器高4.7~3.0cmを測る。土師器は高杯が多く、図示したものの他に個体数として30数個体にものぼる。高杯（11~13）は、口径18.0~15.5cm、器高15.0~13.0cmを測る。杯部の形態から、やや外反しながら斜めにまっすぐ伸びるもの、斜めに伸び端部で一旦屈曲するもの、丸みを持つ体部で口縁端部が外反するものの3種に大別できよう。15は韓式系土器であろうか。口径15.0cm、器高18.9cm、最大径18.0cm、底径9.0cmを測る較質の平底盤である。色調は淡茶灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。体部外面には平行タタキが施され、内面には平行状の当て板痕が残る。口縁端部内面には同心円状のタタキ痕（当て板痕？）が残り、ヨコナデによりナデ消している。遺物の時期は6世紀後半とみられる。

当該地も含めて、生駒山地西麓の傾斜変換地においては比較的土師器高杯の出土が多くみられる。高杯に祭祀用具としての性質を求めるならば、真近にある高尾山との関連を追求していく必要があろう。

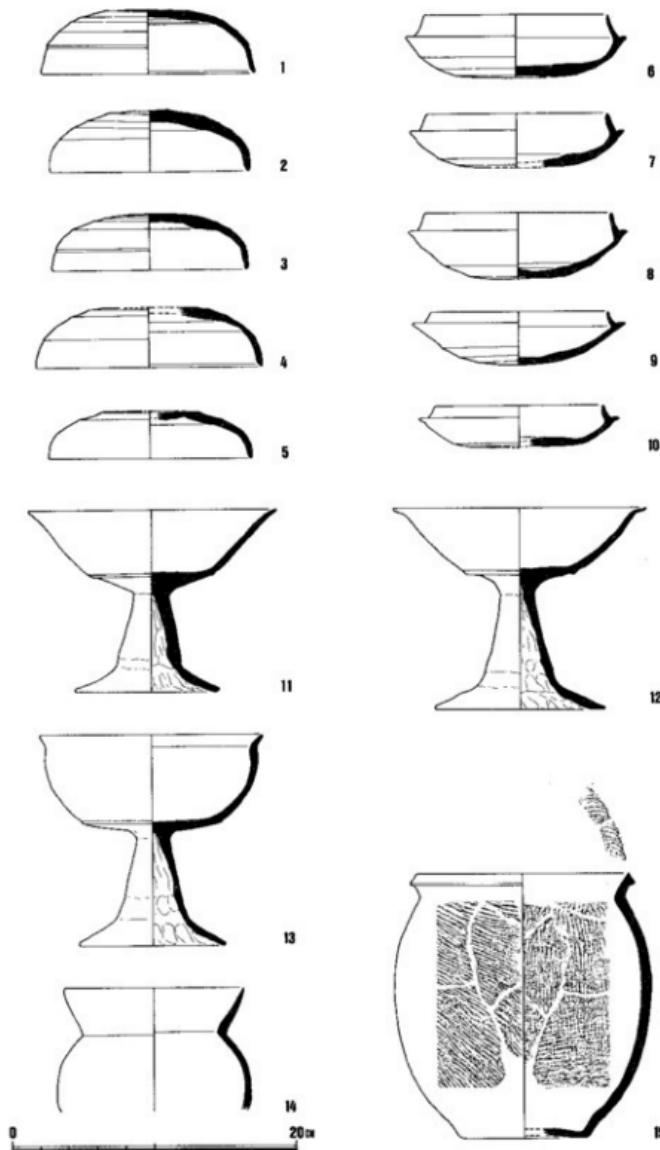


図-20 出土遺物

## 第3章 安福寺横穴群

### 85—1次調査（安福寺横穴群A地点）

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町707番地
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1986年6月23日～7月2日、8月25日～9月22日

#### I 調査の経緯

##### 1 安福寺横穴群の現状

大阪府史跡に指定されている安福寺横穴群は、比較的良好に保存されているものの、その南群については横穴が凝灰岩の露出した崖面に穿たれているため、表土の流出などによって風化が著しく進行している。また樹木の根が凝灰岩層に深く入り込んだため生じたクラックは、雨水の浸透、樹木の垂下等の影響を受け拡大、増加の一途である。一部にはすでに凝灰岩塊の崩落もみられる。また崖面下は安福寺の参道にあるため、こうした南群の状況は通行上も大変危険な状態にある（図版11）。

安福寺横穴群は、昭和47年当時開口していたものについて実測調査が行なわれたが、当初から未発見の横穴の存在が指摘され、またその位置のみを確認し実測を行っていないものも存在している。このような安福寺横穴群・南群の状況においては、確認されている横穴とともに未発見のものも崩壊してしまう可能性がある。人災上の問題も含め、現状は放置しえない状況にあるといえよう。

##### 2 調査の経過

本市教育委員会では、昭和61年4月に横穴群の管理をされている安福寺・大崎信有氏から横穴群、特に南群における凝灰岩層崩落の報告を受けた。この報告に基づき府教育委員会と協議を行ない、その指導のもとに崩落の進行防止と未発見横穴の確認を目的とし調査を実施した。

樹木の伐採は6月23日～7月2日の期間行なった。この際南群12号横穴の上位に横穴を一基発見した。この横穴はほぼ完存していると認められるものであったが、その位置は崖面の中でも崩落の著しいところにあたり、玄室壁面も崩落崖面と數10cmの間隔で接していた。この横穴については從来の命名法を踏襲し南群第18号横穴とした。

発掘調査は8月25日～9月22日の期間行なった。南群の斜面部に埴輪片の散布が認められたが、横穴は確認されなかった。また先に確認された横穴、および府教育委員会の実測調査の際に、埋没していたために位置のみ確認されていた17号横穴について調査を実施した。調査後玄室を埋め戻すとともに、斜面にツヅジを植栽し表土の流出防止に努めている。

安福寺横穴群



図-21 調査地位置図

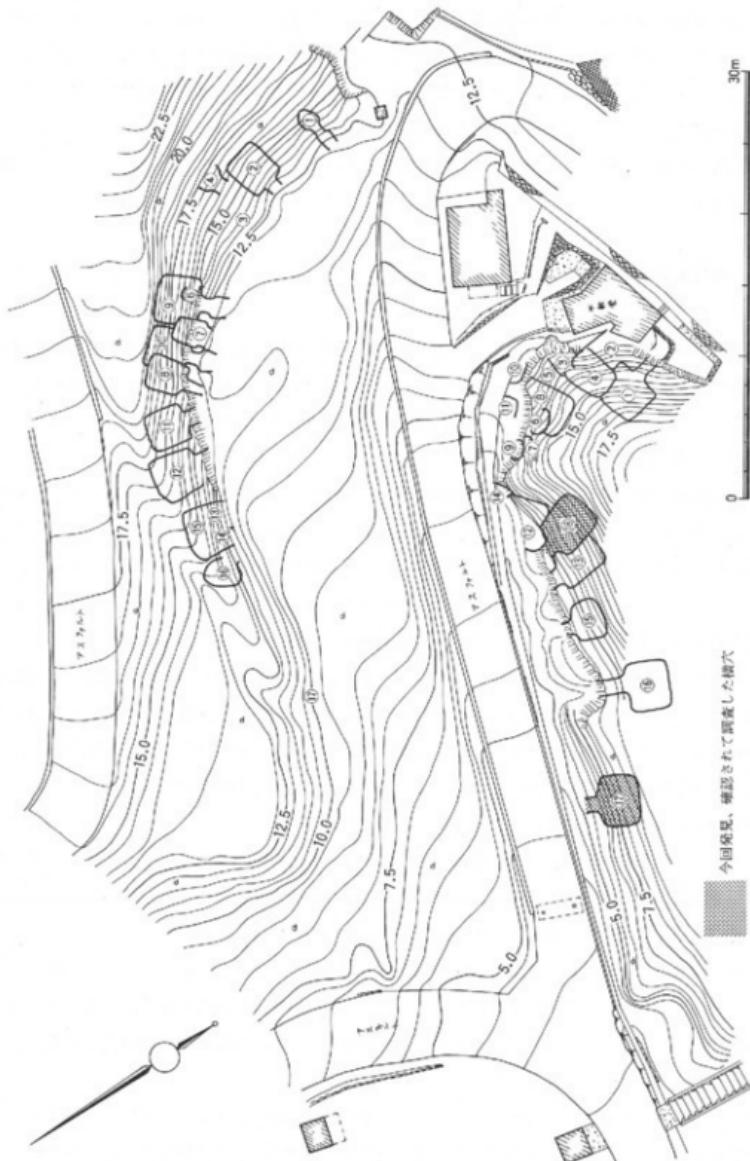


図-22 安福寺横穴群 A地点平面図(大阪府文化財調査概要1972-5に加筆)

## 安福寺横穴群

なお安福寺横穴群は、従来安福寺の境内域に存在する北群、南群の34基をもって史跡指定されていたが、昭和58年約100m北に離れた地点から5基の横穴が発見され、昭和59年に追加指定されている。今回の報告では従来の史跡指定地をA地点、追加指定地をB地点とする。

発掘調査にあたっては土地所有者の安福寺、伯太彦神社の懇切な御協力を得るとともに、帝塚山大学 塚田直、奈良大学 水野正好両先生の御助言を賜わりました。ここに記して感謝の意を表します。

## II 横穴群の位置と従来の調査、研究

### 1. 横穴群の位置 (図-21)。

安福寺横穴群は大和川と石川との合流点に近く、南北に長い玉手山丘陵の北半分、西斜面に位置する。玉手山丘陵の西斜面は東斜面に対し比較的急傾斜で、西下する小尾根と幾筋もの小谷によって起状に富んだ地形を呈している。ただし北半部はこうした変化が少なく、横穴群の位置する周辺が変換点にあたっている。

従来安福寺横穴群は、東西の長さ約80mの西に開く小谷に、北群、南群の34基をもって形成された横穴群として知られていた。ところが最近になって、北側約100mの地点にも小谷内に5基の横穴をもって形成された横穴群が発見され、その範囲が北側に拡大されることが知られてきている。ところで横穴は一般に軟質の岩盤を求めて構築されているが、安福寺横穴群も第三紀中新世の二上層群の一つである玉手山凝灰岩層という軟質の岩盤の中に穿たれている。この凝灰岩層はB地点以北では確認されていない。また丘陵の北半部は起伏の少ない地点でもある。横穴という古墳の形態と築造技術からみれば、構築の際には地形と地質という2点から大きな制約を受けるものであろう。従って以上のような地形、地質の状況からみて、安福寺横穴群は南北ほぼ100m程の間に、従来から知られたA地点を最大とし、B地点のような小群を単位とする数地点からなる横穴群として捉えなおす必要がある。

また玉手山丘陵の東斜面には、安福寺横穴群から約600m南に離れ、A、B、Cの3群からなる玉手山東横穴群が位置している。現在は宅地造成によりその大半が消滅している。

### 2. 従来の調査研究と横穴群の歴史的位置

横穴群は古く江戸時代の文献に紹介されているが、明治、大正期を通じいくつかの横穴について報告が行なわれてきた。また昭和47年、著名な高松塚古墳の調査前後には、横穴群の線刻騎馬人物像が注目されることとなった。そして昭和47~48年の大阪府教育委員会の実測調査によって、ようやくその全体像が明らかにされたのである。

この調査では北群として17基、南群として17基の横穴を確認し、その大半について実測図が作製された。そして本横穴群が古くから開けられ、年代を決めるべき遺物がほとんど残されていないという限界があるが、玄室のプランや大きさ、玄室の天井・側壁境の切り込み段等をもと

にして、横穴群の築造が6世紀後葉に始まり、6世紀末葉、7世紀初葉という年代的な形態変化がみられることを明らかにした。さらにこの変化の歴史的背景として、石室に対する数体埋葬から一体埋葬、すなわち家族墓から個人墓へという変化を想定し、7世紀前半に家族に対する規制の強化が認められるとしたのであった。こうした見解が、現状では安福寺横穴群の基礎的な理解といえよう。

### III 調査の成果

#### 1. 南群17号横穴

本横穴はA地点の小谷の中に営まれた横穴としては最西部に位置し、墓域としてみた場合には、最も入口に近いところにある（図-22）。昭和47年、実測調査当時には天井が崩落し埋没していたため実測図は作製されなかったが、その報告書に所収された大正年間の坪井良平氏による実測調査図をみると、玄室長約2.8m、幅約3.5mの片袖式の横穴として知られ、天井・側

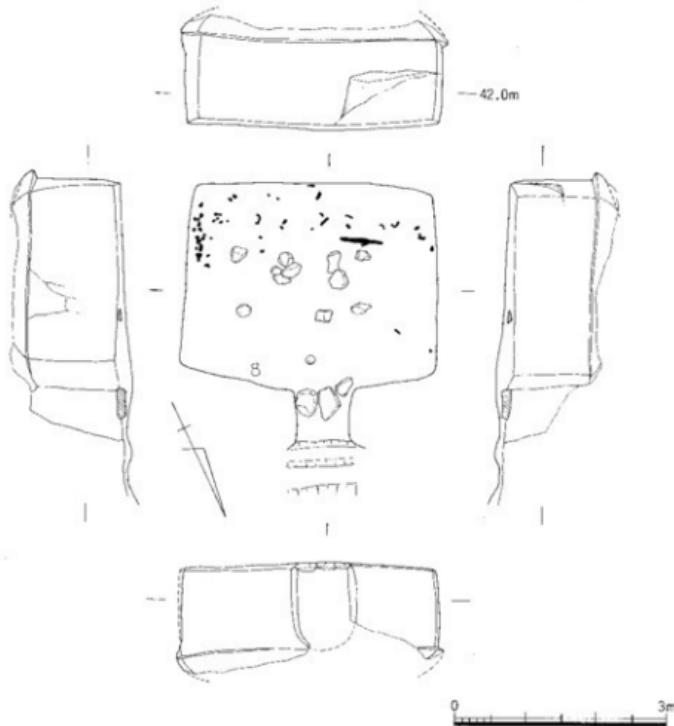


図-23 南群17号横穴実測図

## 安福寺横穴群

壁境の切り込み段より下は約30cmまで埋没していたものと思われる。今回の調査では、こうした状況とは若干異なる新見知を得ることができた。

横穴は北北東に面する斜面に築かれ、N-25°-Eの方向に開口する。玄室天井は崩落しており、天井・側壁境の切り込み段を残すのみである。玄室内の堆積土は、上部から凝灰岩層を覆う礫層、凝灰岩層、江戸期の遺物を含む黒灰色砂礫土層が認められ、前二者は昭和期の天井崩落の際の堆積土、後者は大正年間に実測された際、すでに堆積していた土砂であろう。

玄室の平面形は大略横長方形を呈し、中央部玄門方向に張らんでいる。玄室の長さは左・右側壁とも2.5m、中央部で最大となり2.92mを測る。幅は奥側側で3.3m、玄門側で3.6m。各壁面と天井との境には最大幅10cmの切り込み段がみられる。床面からこの段までは1.08mの高さがある。ただしこの段は玄門左・右袖部では、玄門に近付くに従い幅を減じ消滅している。床面は左・右側壁、奥壁に接する三方が最も高く、玄門部で最も低くなっていてその差は約20cmである。排水溝等の明瞭な施設は築かれていらないが、床面のこうした状況が同様の効果をあげていたものかもしれない。また壁面は平滑に仕上げられているが、この床面には全面にノミ痕が残されている。玄門は左袖幅1.6m、右袖幅1.2m、玄門幅0.84mで、玄門は玄室右寄りに偏して位置する。玄門の渓道部側には、最大長45cmを測るものを含む3つの石が、小口面を玄

室側に揃えるようにして置かれていた。閉塞石として使用されたものであろう。渓道は長さ0.7m、幅0.73m。渓門部の外側には幅約0.4mの浅い溝が築かれている。さらに、その外側は小谷内に下る斜面になっていて、明確な墓道は検出されなかつた。

玄室内の中央部には東・西1.96m、南・北1.06mの範囲に11個の石が置かれていた。これらは玄門部に向って下がる床面凹部を埋めるように堆積した凝灰岩質の砂質土上に置かれていて、直接床面には接していない



図-24 南群17号横穴遺物出土状況

い。棺台として使用されたものであろう。また左側壁に沿い、奥壁近くには須恵器の杯蓋、有蓋高杯、長脚高杯の破片群、奥壁に沿い棗玉、刀等の鉄製品、右側壁の奥壁近くに須恵器の提瓶が直接床面上から検出された。玄門近くから発見された須恵器、土師器の長頸壺は床面から約15cm高く、凝灰岩質の砂質土上に置かれたものである（図-24）。

#### 土器（図-25）

1～6はすべて玄室内から出土したもので、1は土師器、他は須恵器である。1は長頸壺の完形品。頸部は外反し口縁端部は丸くおさめる。体部の最大径は中央部よりやや下位にある。器面の剥落が多く調整は不明な部分が多いが、頸部～体部上半は回転ナデ調整、体部下半は4分割のヘラミガキ、底部はハラケズリである。2、3は杯蓋。いずれも径14.0cmで天井部にゆるやかな稜をもち、端部は内傾し段をもつ。黒灰色を呈する。4は有蓋短脚高杯。脚部はその破片が一部存在するが接合しない。径9.6cm、立ち上がりは短く内傾し、受部は短く斜め上方に延びる。黒灰色を呈する。5は壺の体部。最大径は体部上半にあり肩部をもつ。体部上半はナデ調整、下半は回転ヘラケズリ調整。黒灰色を呈する。6は提瓶。口縁部はなく、体部もほとんど欠損している。体部は全面に細かいカキ目調整がみられ、釣手はカギ状のものである。黒灰色を呈する。その他に図示できなかったが、須恵器の長脚二段透し高杯の破片がある。

#### 鉄製品（図-26、27）

鉄製品には鉄釘、鎧、金具、鎌、鉄刀があり、大半は奥壁に沿い床面上から出土した。

鉄釘は8点出土しているが、いずれも頭部の形態は不明で図示できるものは7のみである。一辺0.8cmの断面方形の釘で横方向の木目を残している。鎧は4点出土しているが、破片のため正確な個体数は不明である。11には横方向の木目が残る。

14-a、bは用途不明であるが金具状の鉄製品である。aは一辺0.8cmの断面方形を呈する鉄片を90°に折り曲げたもの。bは断面長方形の偏平な鉄片の一端を卷いたもので、縦方向の木目を残している。

6は鎌。長さ12.3cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。両刃である。

10は鉄刀。現存長56.6cm。刀身と茎との境は明瞭ではなく刀身幅3cm、背厚0.9cm。両刃で刀身の断面形は大略三角形を呈する。背はわずかに内反りの感じがあるが、直刀であろうか。鎧近くには木目を残している。

#### 玉類（図-26）

琥珀製の棗玉が8点出土している。出土位置は奥壁に沿い玄室南東の一郭である。図示した4点以外は小片で形状は不明であるが、断面形が梢円形で偏平なもの（1、3）と円形のもの（2、8）とがある。8の長さが2.1cmとやや小形であるが、他のものは2.6cm前後で、幅はいずれも1.4cmである。孔の直径は0.3cm。色調は赤褐色で不透明、表面は平滑に仕上げられている。

安福寺横穴群

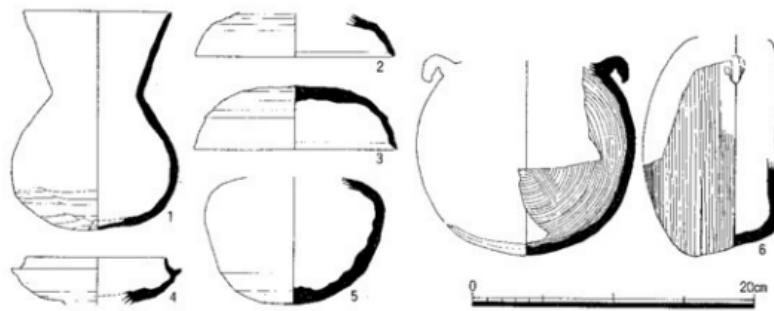


図-25 南群17号横穴出土土器

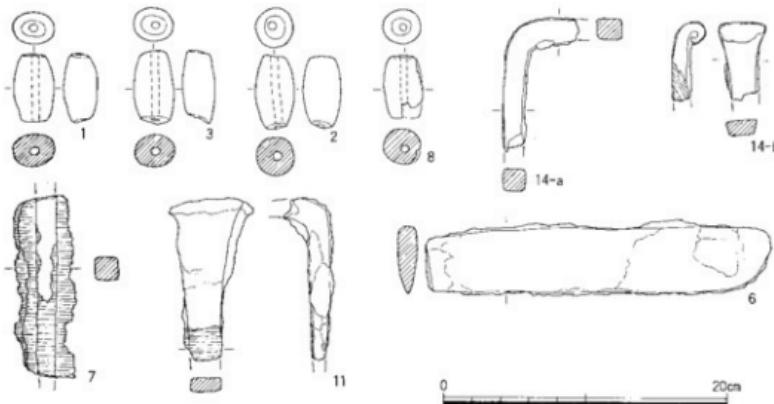


図-26 南群17号横穴出土玉、鉄製品

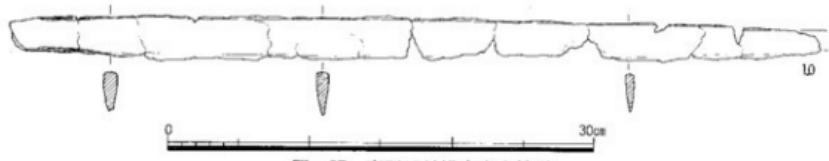


図-27 南群17号横穴出土鐵刀

## 軒丸瓦（図-28）

玄室の堆積土の中には瓦片、陶器片などが含まれていた。図示した軒丸瓦もその一つである。瓦当面には梵字で「ア」記され、その下に蓮草を配している。おそらく江戸期のものであり、安福寺中興期の遺品であろう。従って、江戸期以前は玄室内にはそれ程土砂の流入、堆積はなかったものと思われる。

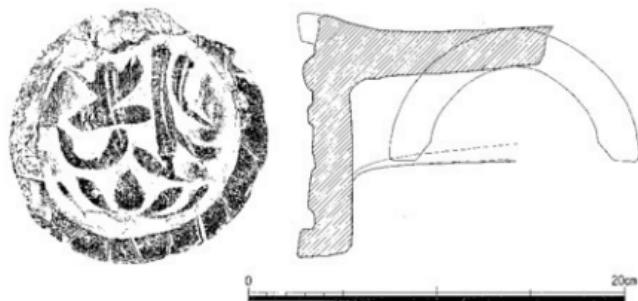


図-28 南群17号横穴堆積土内出土軒丸瓦

南群17号横穴出土の土器は須恵器杯蓋、提瓶等から6世紀中～後葉(一部末葉まで降るものもあるか)に位置付けられ、7世紀に降るものはない。この中で床面上にあるもの、床面に一定の土砂が堆積した後に置かれたものという見方をすれば、1、5の巣類が後出するものであろう。次に遺物の出土状況をみると、奥壁と棺台の間の長さ2.5m、幅1m程の空間に鉄釘、鏡などの木棺関係の部品、鉄刀、鎌、棗玉などの副葬品が存在しているため、ここに一棺を想定したい。さらに玄室内に凝灰岩質の砂質土がわずかに堆積した後、この棺の北側、玄室中央部に棺台が置かれ、一棺が追葬されたものと思われる。

## 2. 南群18号横穴

本横穴は樹木伐採の際に新たに発見されたもので、玄門、廻道の大井が崩壊し、わずかに開口していた。南群ではほぼ中央部に位置し、北北西に向いた斜面に築かれている(図-22)。ここには12、13、14号横穴が密集するが、本横穴は下から三段目、最高所に位置している。

横穴はN-16°-Wの方向に開口している。玄室は天井が崩落し、石棺部以外は凝灰岩塊、砂質土が堆積していた。この堆積土の中からは鎌倉期の常滑産の甕が出土した。玄室の平面形は造り付けの石棺を含めた場合、縦長方形になる。左側壁と玄門左袖壁との間に異様な出張りが存在する。玄室左側壁の長さ2.84cm(出張りを含めると3.05m)、右側壁の長さ3.3m、奥壁の長さ2.6m、玄門部の長さ2.04m(出張りを含めると2.26m)、玄門幅1m、右袖壁の長さ0.46m、左袖壁の長さ0.58m(出張りを含めると0.8m)。左・右側壁には床面から1.4mの高さに大

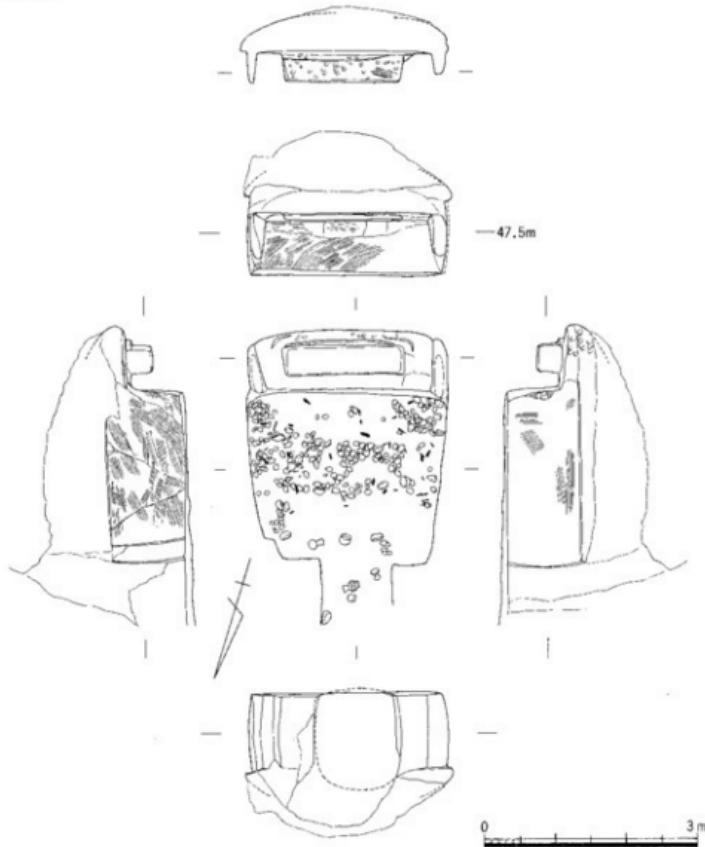


図-29 南群18号横穴実測図

井・側壁境の切り込み段がみられるが、奥壁ではなく、左・右袖壁では玄門に近づくに従い消滅している。床面は玄門に向いやや下降している。北東隅に幅3cm程のクラックが入っており、ここから崩落する危険性がある。床面の中央部には、幅約1mの範囲に帶状に小礫が敷かれ、南東隅、南西隅にも部分的にみることができる。チャート、花崗岩、安山岩などが利用されており、おそらく凝灰岩層を覆う礫層中のものであろう。こうした床面の小礫敷きは、玉手山東横穴群に見出すことができる。羨道は幅1m、長さは不明。玄室のほぼ中央に取り付くが、玄門部の長さを先の出張りを含めて考えた場合、やや右側に取り付くことになる。

造り付け石棺は、最大幅0.2m、最大の深さ0.6mのU字状の溝で左・右側壁から切り離され

ている。石棺上面の外縁は長さ2.46m、幅0.83m、高さ0.84m、やや裾広がりの形状をもつ。内法は長さ1.7m、幅0.4m。奥壁側の長側辺は2段掘りになっていて、この段の部分と石棺前面側の上面の高さが等しくなる。この部分で深さ0.3m。また石棺上面には中央部の掘り込みに沿うように、南東部、南西部に2箇所のL字形の刻みがみられ、石棺の蓋取りのようなものかもしれない。

玄室各壁面の状態は、左・右袖壁では平滑に仕上げられている。右側壁も比較的丁寧に仕上げられているが、南半部には幅の狭いノミ痕を残している。造り付け石棺の前面、左側壁には幅の狭いノミ痕がほぼ全面に残されている。石棺の上面は平滑に仕上げられているが、部分的に幅の広いノミ痕がみられ、掘り込み内にも同種のノミ痕が残され荒い仕上げになっている。また石棺の小口に対応する左・右側壁面も仕上げは荒く、幅の広いノミ痕が残されている。

#### 土器（図-31）

南群18号横穴からは8点の土器が出土している。1～6は土師器、7、8は須恵器。玄室からは小形楕、蓋杯、玄門付近に長頸壺、小形甌、羨道部に高杯、小形甌、台付長頸壺がみられる。このうち玄門部の小形甌は床から約3cm、羨道部の壺、小形甌は床から約15cm浮いた状態

で出土し、凝灰岩質の黄灰色砂質土が堆積していた。

1、2は小形の楕。1は造り付け石棺の前、左側壁近くで破片として出土した。口径10cm。体部はナデ調整。2は玄室東半、中央部で出土。約1m離れて接合した。口径13.5cm。口縁部ヨコナデ調整、体部ナデ調整。器面には指頭痕が残る。

3、4は小形の甌。3は羨道部から出土したもの。完形。口径10cm。口縁部ヨコナデ調整、体部はナデ調整で指頭痕が残る。4は玄門部のほぼ中央で出土。完形。口径13cm。口縁部は直立し、端部は外反して丸くおさめる。体部は球形。口縁部はヨコナデ調整、体部上半はハケ調整の後ナデ調整、下半は8本/cmのハケ調整。内面は板状工具によるナデ調整。

5は高杯。羨道部から出土し、脚掘部の一端を床面につけ、杯部を玄室方向に



図-30 南群18号横穴遺物出土状況

安祇寺横穴群

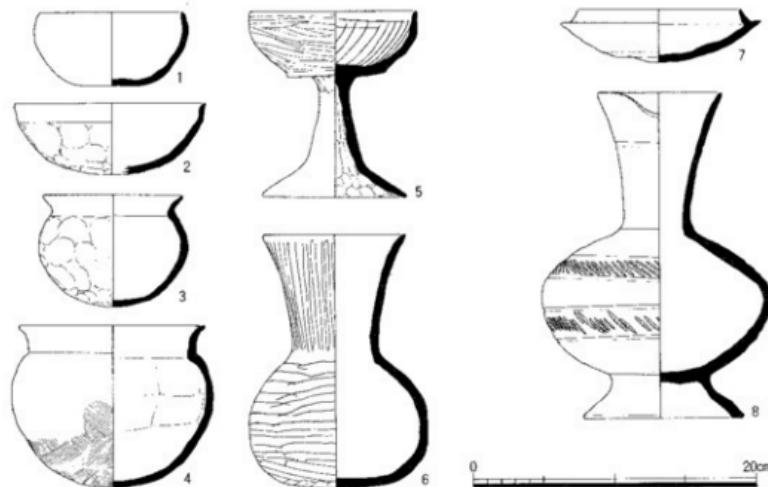


図-31 南群18号横穴出土土器

向けるように傾いた状態で出土。完形。口径11.7cm。杯部は深く、口縁は直立し、やや内湾する。杯部外面に段がある。杯部外面はヨコ方向のヘラミガキ、内面には放射状暗文がみられる。脚部はナデ調整、内面はシボリ目、襯部は指頭上底。

6は長頸壺。体部の一部を床面につけ、横倒しになった状態で出土。口径10cm、高さ18cm。頸部はゆるく外反し、体部は線形、底面は平坦になる。頸部外面はタテ方向の荒いヘラミガキ、体部は4分割のヘラミガキ、底面はハラ削り調整。赤褐色で焼成の堅緻な土器である。完形。

7は蓋杯。玄室西半、ほぼ中央部で口縁部を下向きにし、床面に数かれた小礫の上から出土。完形。口径11.3cm、高さ3.6cm、浅い杯である。立ち上がりは短く内傾し、受部はやや斜め上方に延びる。底部は左方向の回転ヘラ削り。

8は台付長頸壺。漢道中央部から横倒しの状態で出土。完形。高さ23cm。口頸部は長く、ゆるく外反し1条の凹線がめぐる。口縁部には1ヶ所をくぼめて注ぎ口が設けられている。体部は偏平な球形で最大径は1/2前後にある。4条の凹線をもって2つの文様帯があり、櫛齒状工具による右下りの刺突文によって飾られている。口頸部、体部上半、台部はナデ調整、体部下半は左方向の回転ヘラ削り。

鉄製品（図-32、33）

玄室から出土した鉄製品は49点あり、鉄釘43点、鎧5点、刀子1点である。

鉄釘は大部分が破損品で、特に頭部を欠損しているものが多い。従って43点という数量が、玄室内に本来存在した鉄釘の個体数とはいえないだろう。先端部の遺存する釘は16点あり、こ

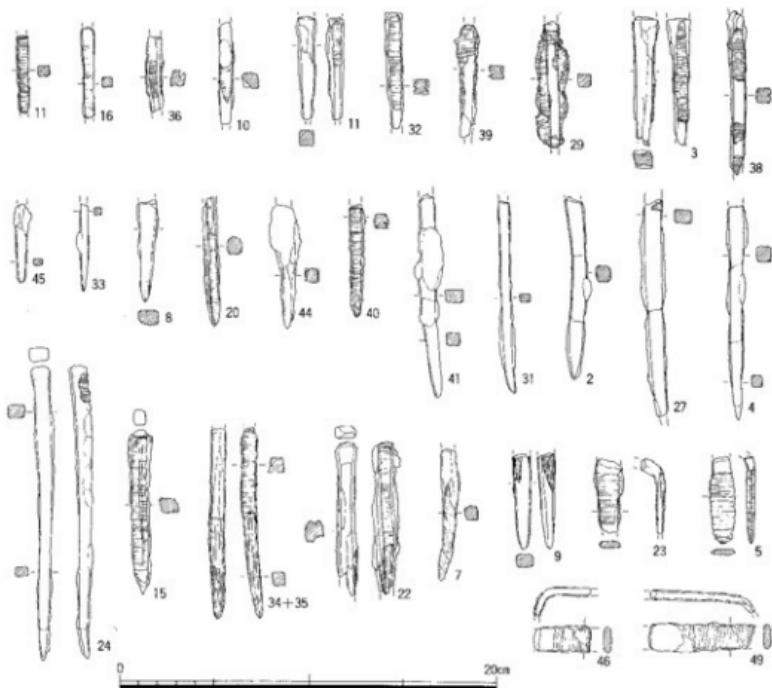


図-32 南群18号横穴出土鉄製品

れに若干数を加えた数量が本来の数字であろう。おそらく2棺分の鉄釘が遺存しているものと考えられる。

完形品をみると長さ15.5cmの大形品(24)と8.5cm程の小形品(15)とがある。断面形は長方形のものと正方形のものとが存在するが、一本の釘の部位によって形が異なるようで、頭部近くは長方形、先端部近くは正方形に近づく傾向が認められる。頭部の形状は長方形のもの(24、15、22)と正方形のもの(32?)とがある。木目にはヨコ方向、ヨコ方向+タテ方向(34、35、22、9?)という2種類がみられる。後者は木棺の短側板と長側板の結合に用いられたものであろう。また22の釘のヨコ方向の木目の範囲から推定すると、木棺の側板はおよそ5.5cmの厚さをもっていたものと思われる。

鎌は5点出土しているが、これも本来の個体数ではなかろう(23、5、46、49)。手部の長さは5cm程とみられ、鎌としては小形のものである。手部の内外面、背部内面には、いずれもヨコ方向の木目が残っている。

刀子(図-33)は玄室のほぼ中央部から出土している。現存長7.7cm、背の厚さ0.5cm、刃部

安福寺横穴群

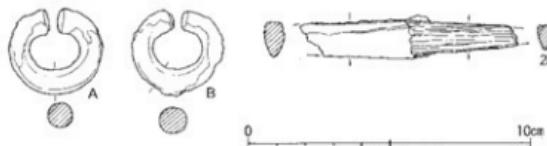


図-33 南群18号横穴出土銀環、刀子

の断面形は三角形状を呈する。刃部と柄の境付近に最大幅があり 1.3 cm。木質に覆われているが開がつくものかもしれない。

柄には木質が残っており、断面形はほぼ三角形である。

銀環 (図-33)

銀環は 2 個体が対をなすように東西に並んで出土した。部分的に銀が剥落し、かなり緑青がみられるので銅芯と思われる。A、Bとも外径 3.2cm、断面径は 0.8cm で円形。重量は若干異なり A が 23.9g、B が 21.4g。こうした数値からみて、両者は一組のものである。

陶器 (図-34)

玄室の堆積土上部から常滑産の甕が出土した。口頭部を欠損しており、最大径 43.8cm、底径 14.6cm、高さ 36cm 以上。肩部には 6 個の右巻き巴文の押印がある。その下には 1~2 本の沈線があめぐり、頸部から肩部には緑黄色の自然釉が付着する。14 世紀前半。おそらく藏骨器として用いられたものであり、中世の横穴利用形態を知る上で興味深い資料である。

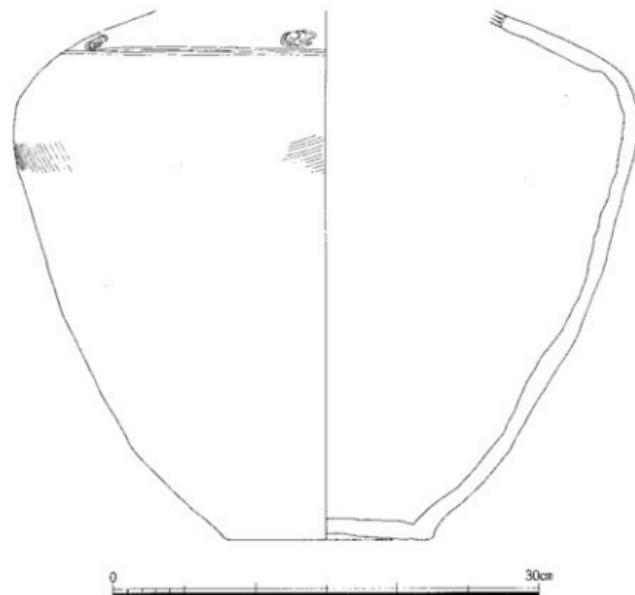


図-34 南群18号横穴玄室堆積土内出土陶器

18号横穴は、出土した土器から判断すると6世紀末葉に築造され、7世紀を前後するわずかな時期に埋葬が行なわれたものと思われる。この間に、鉄釘からみた2つの木棺と造り付け石棺の3体の埋葬が行なわれた。

ところで木棺はどのように置かれていたのだろう。これには玄室内の鉄釘の分布状況が参考になる。しかし土師器・椀が離れた地点で接合すること、鉄釘の分布がかなり散乱のことからみて、床面上の遺物が原位置を動いている可能性が高く、その分布から即断はできない。ただし鉄釘の分布は小礫の敷かれている玄室の南2/3程度の範囲に限られ、完形品土の置かれた玄門付近には及んでいない事実は重要であろう。仮にこの小礫敷きの空間に埋葬が行なわれたものとすると、その範囲は東西2.7m、南北1.5mになり、南北方向すなわち玄室の主軸に沿った木棺の配置は考え難くなる。また鉄釘の分布が原位置ではないにしても、この室間の中で東、西に集中する傾向が認められる。木棺では長側板、短側板、底板を結合するため、小口部分に鉄釘が集中して使用されているが、鉄釘が東、西位置に集中する傾向は、こうした木棺の部位を反映しているのだろう。おそらく木棺は造り付け石棺に平行し、主軸に直交して安置されたものと思われる。

### 3. 南群・斜面採集の埴輪 (図-35)

樹木代採中に斜面上部から埴輪片を採集した。円筒埴輪(1~7)、形象埴輪(8、9)で、円筒埴輪は6世紀代のものである。これらが斜面に樹立されていたものかどうかは不明である。

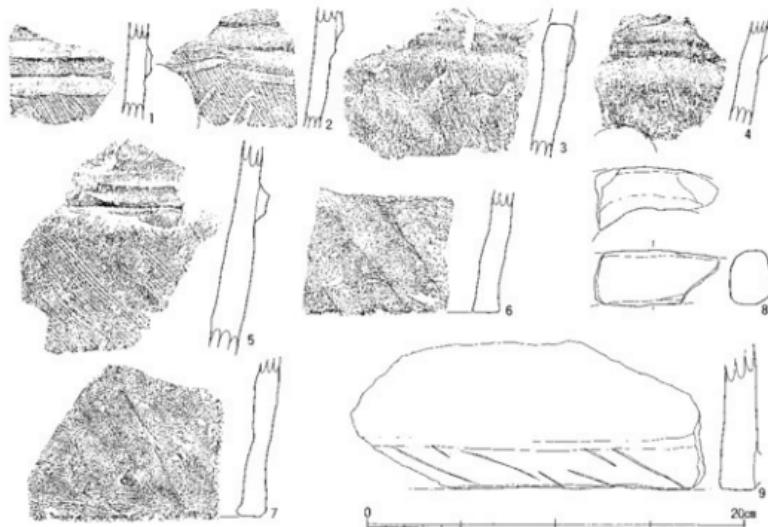


図-35 A地点南尾根北斜面（南群）採集の埴輪

### Ⅲ まとめ

#### 1. 18号横穴の造り付け石棺について

横穴にみられる造り付け石棺は、横穴掘削当初から設けられたものか、あるいは追葬時に付加されたものか、横穴を検討する際にしばしば問題になっている。ここでは18号横穴について観察の結果を述べてみたい。

玄室の左・右側壁、玄門部左・右袖壁、石棺前面の壁面は比較的平滑に仕上げられている。ノミ痕は部分的に残されているが、その幅は狭く極めて浅い点で共通しており、丁寧に調整している様子を伺うことができる。これに対して左・右側壁の石棺短側辺に対応する部分、奥壁および石棺上面、内面には幅が狭く短く、しかも深いノミ痕が残されている。玄室の多くの壁面が平滑に仕上げられているのとは対象的に荒い仕上げになっている。

石棺を左・右側壁から切り離しているU字状の溝は十分な深さがなく、床面まで及んでいない。従って石棺の独立性は不十分である。そのために玄室左・右側壁は石棺前面と連接していて、その部分にも細く浅いノミ痕を残している。

玄室の左・右側壁と石棺の短側辺に対応する壁面との境には不自然な段があり、先述した調整の相違とともに、一つの壁面としての一体性に欠けている。

玄室左・右側壁、玄門部左・右袖壁の一部には、天井・側壁境の切り込み段がみられる。段の幅は平坦面で最大8cmを測る。この切り込み段は奥壁では存在せず、左・右側壁の石棺に対応する部分では高さを異にし、幅が狭く一部では消滅している。また奥壁部分も実際には垂直な壁面としては存在せず、石棺上面からカーブを描き、連続して天井に到っている。

以上のような諸点が18号横穴の玄室、造り付け石棺の特徴である。ところで安福寺横穴群A地点には方形の玄室空間をもち造り付け石棺をもつ例が南群に2例（4号、8号）みられ、また造り付けの棺台をもつ例が北群に1例（12号）知られている。石棺、棺台の築造上の独立性という視点でみた場合、それぞれ左・右側壁、あるいは奥壁（4号）から完全に切り離されていて、石棺、棺台の短側辺は床面から立ち上るように造られている。南群8号横穴では石棺と奥壁との間が浅い溝によって区切られてもいる。またこの8号横穴では天井・側壁境の切り込み段がみられるが、この段は左・右側壁、奥壁をめぐっており、奥壁も垂直に立ち上る一つの面を形成している。

横穴は築造時にすでに完成された埋葬空間であったろう。たとえ造り付け石棺が壁面に付きれたとしても、当初から計画されたものであれば、南群8号横穴のように石棺部分も同質な玄室空間を保持していくよう。そうした意味で18号横穴の造り付け石棺は、追葬時に付加されたものと考えられる。おそらく石棺前面の平滑な壁面が築造当初の奥壁に相当しよう。従って18号横穴は本来は正方形に近い平面プランをもっていた。このように横穴の造り付け石棺には、築造時に造られたものと追葬時に付加されたものとがある。

## 2. 17号、18号横穴の位置づけ

A地点の横穴群については玄室平面プラン、天井・側壁境の切り込み段の在り方をもとにして3タイプの横穴に分類されている（大阪府教育委員会 1973）。それによると平面方形を呈し、切り込み段の幅が広く全壁面をめぐるもの（A）、平面縦長方形に近く、切り込み段が線状になり全壁面をめぐらないもの（B）、平面形が変化に富み小規模、切り込み段のないもの（C）があり、AタイプからBタイプ、BタイプからCタイプへと変化し、その年代は6世紀後葉、6世紀末葉、7世紀初葉であるという。先にこうした年代観、編年観は数少ない資料をもとにした基礎的理理解であると述べたが、今回の調査はこれを補強するものであり、大きな訂正点は少ないように思われる。

ここでは17号、18号横穴の平面プランに關し若干の問題点に触れておきたい。17号横穴は6世紀後葉に築造、営まれたもので、Aタイプに属するものと思われるが、平面形態は横長方形と表現すべきものである。18号横穴は6世紀末葉に築造、7世紀初葉まで営まれたもので、現在遺存している平面形態は縦長方形であるが、造り付け石棺を追葬時に付加されたものとみた場合、本来は正方形に近くAタイプに属するものと思われる。この17号、18号横穴の年代的な違いは、両者を同じA地点南群に築造された横穴として捉える時、同じAタイプにあっても横長方形に近い平面プランから正方形に近いものへ移行するのではないかという予想を抱かせる。6世紀後葉という年代は周辺の玉手山東横穴群、あるいは高井田横穴群においても横穴の築造が始まると時期である。この時期の横穴をみると、平面形態は正方形に近く、天井・側壁境の切り込み段が壁面をめぐるものが大半であろう。逆に6世紀後葉のAタイプとして横長方形の平面プランをもつ横穴は、安福寺横穴群 A地点の17号横穴、およびその東側に築かれた15号、16号の一群に限定されてしまう。その意味では、こうした一群は年代の指標となるべき普遍性をもたない、特異な一群として理解すべきものかもしれない。

17号横穴では横穴の穿たれた凝灰岩層を覆うように礫層が観察され、横穴上部の凝灰岩層の厚さは1.7~1.9m程であった。この横穴が6世紀後葉に築造されたとすれば、A地点南群の横穴群は、同様の構造をもった横穴が分布する小谷の入口部から築造が開始されたものと思われる。凝灰岩層の厚さを考慮すれば、この一群は横に並んで築造せざるを得なかっただろう（図22）。これに続く時期に築造を開始する一群は、従ってさらに尾根の東部に移動した。この位置は斜面の方向が北東向き、北西向き、東向きなど変化し、凝灰岩層も厚く、横穴を継続して築く際に上、下の移動も可能である。それぞれの斜面を一つの築造単位として捉えることもできよう。18号横穴の築かれた北西向き斜面では、半壌しているものが多いが、遺存する切り込み段の比較から最上部の18号横穴から築造が始まったものと考えられる。

## 第4章 田 辺 遺 跡

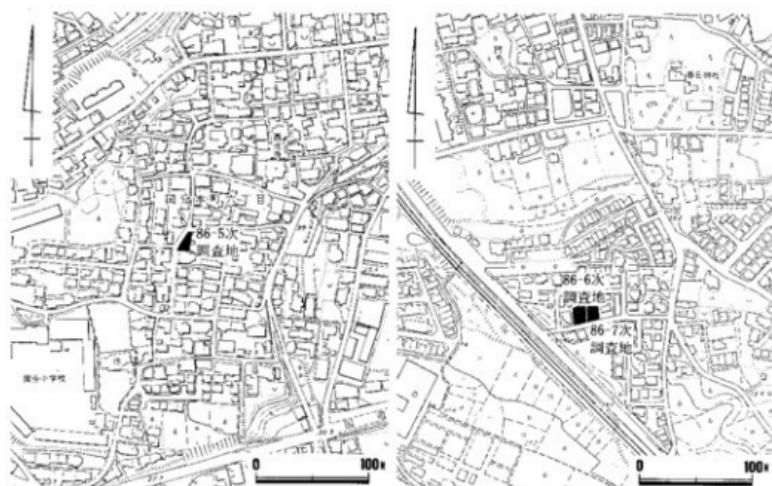


図-36 調査位置図(方位は真北)

### 86-5次調査

- ・調査地所在地 柏原市国分本町6丁目  
1462
- ・調査期間 1986年9月25日  
～9月27日
- ・調査面積 38m<sup>2</sup> / 374m<sup>2</sup>
- ・調査担当者 石田成年

### 調査概要

当該地は田辺から芝山へと延びる丘陵上に位置する。標高は42～43mを示す。

対象地の東北隅（1区）、東南隅（2区）、南西（3区）に2m四方の調査区を設定し、人力による掘削を行なった。2・3区では現地表下約30cmで茶橙色粘質土の地山に達した。



図-37 調査区位置図

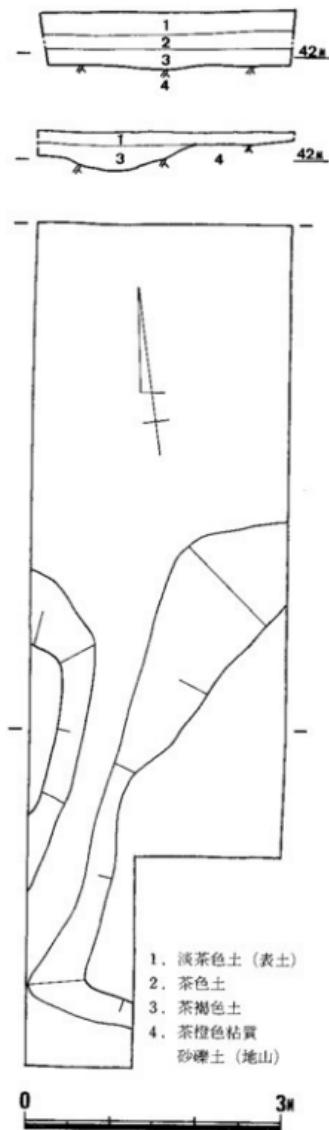


図-38 1区平面図・土層図

遺構、遺物は認められなかった。1区では第3層の茶褐色土中に埴輪片が含まれていたため南北方向に調査区を拡張し、遺構の検出に努めた。その結果、深さ約30cmの溝状遺構を検出した。

出土遺物には須恵器、土師器、埴輪、サヌカイト剝片、銅錢（寛永通宝）があった。何れも細片であるため実測できない。埴輪の断面図のみ図示した。胎土は粗く、最大2mm程度の石英を多く含む。色調は明茶黄色を呈し、外面には朱が塗布されている。外面調整はヨコハケ。凸帯の形態には図示したように3種類みられる。時期は5世紀後半頃であろう。小片となっているものの劣化が少なく、また立地条件等からも周辺地に古墳の存在を求められよう。ただし前述の溝状遺構については溝の埋土である第3層中から寛永通宝の出土があったことから、ただちに古墳に附隨するものとは決定し難い。

当該地周辺は家々が建ち並び、その際に削平を受けているであろうから、過去の景観を窺い知ることはできない。しかし今回、古墳時代中期後半の埴輪の出土があったことで、田辺から芝山にかけての同一丘陵上にある松岳山古墳群のあとに続く古墳（群）の存在は充分に想定できよう。

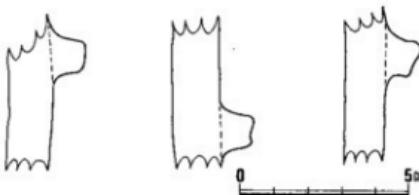


図-39 出土埴輪断面図

## 86-6次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2丁目3-4
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1986年11月17日~18日
- ・調査面積 10m<sup>2</sup> / 169.8m<sup>2</sup>

建物予定地に、2m×5mの東西に長い調査区を設定し、調査を実施した。地表下には、既設建物の建築、および除去に伴い瓦礫を含んだ盛土が約50cmの厚さを測り、その直下で地山に至る。したがって、遺物包含層は認められない。地山は、暗黄褐色、ないし褐色の砂礫土であり、かなり堅固である。既設建物に伴う南北方向の排水溝が、地山にまで達している。現地形は、東から西へ緩やかに傾斜しており、地山面も、同様に西側が低くなっている。

遺構は、掘立柱建物の柱跡と考えられるピットが3個と、土坑が1個検出された。

ピット-1は、1辺60cmの正方形平面を呈し、ほぼ中央に直径約14cmの柱の痕跡が確認された。掘方は、深さ28cmを測る。掘方内から、須恵器杯蓋(1)が出土している。これ以外にも、土師器、須恵器片が出土しているが小片ばかりである。また、サヌカイトの未加工の原石や、剥片が出土している。

ピット-2は、72cm×40cm以上の隅丸方形平面を呈すると考えられ、やや西寄りに、直径約22cmの柱の痕跡が確認できた。掘方の深さは、約40cmに達する。掘方堆土内からは、須恵器杯蓋(2)、須恵器杯身(3)、土師器羽釜(4)が出土しており、やはり、サヌカイトの剥片や原石が出土している。

ピット-3は、その一部を確認したのみであり、実際に掘立柱建物の柱穴になるか否かは未確認である。遺物は出土していない。

土坑-1は、調査区の北西隅で検出し、更に北西方に向へ拡がっている。埋土は、褐色土と青灰色粘質土、かなり水分を含んでいる。深さは約40cmである。埋土からは、土師器、須恵器の小片、サヌカイトが出土しているが時期の判明する遺物は見られない。

ピット-1と2の心々距離は、124cmである。平面形の方向がやや異なるが、同一建物の柱穴の可能性が考えられる。そのように考えるならば、建物の方位は、N-10°-Eとなる。しかし、調査範囲が狭いため、建物の数、規模等は不明である。

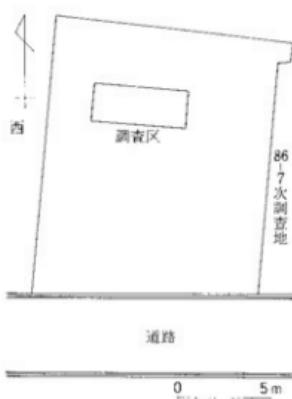


図-40 調査区位置図

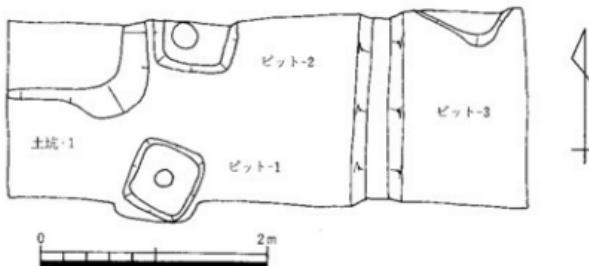


図-41 遺構平面図

遺物は、須恵器、土師器、サヌカイトが出土している。

須恵器杯蓋(1)は、ピット-1から出土している。蓋内面のかえりは消失し、口縁壇部は直角に屈曲する。扁平なつまみを伴う杯蓋であろう。

2～4は、ピット-2から出土している。須恵器杯蓋(2)は、扁平なつまみを有し、器高はやや高い。須恵器身(3)は、低い高台を有し、器高は高い。口縁端部を欠損する。土師器羽釜(4)は、水平にのびる短い鋸を有し、口縁部は外反し、端部は立ち上がり気味に丸くおさめる。口縁部、および鋸はヨコナデ、内面ナデ調整。

須恵器・土師器は、いずれも8世紀代と考えられる。

他に、サヌカイトがコンテナ箱に1箱程度出土している。未加工の原石や剝片ばかりであり、製品は見られない。

以上のように、調査地周辺には、8世紀代の掘立柱建物を中心とする集落が存在すると考えられるが、地山構造面が地表下50cm前後であり、建物の基礎深度が20～30cmであるため、遺構面に影響を及ぼすことはないと判断し、調査区の拡大は行なわなかった。

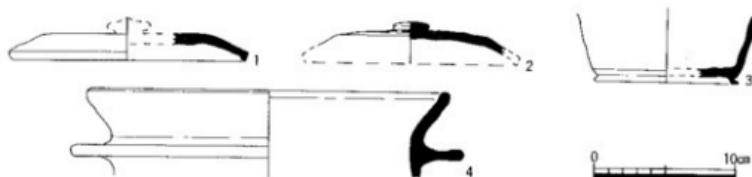


図-42 出土遺物

## 86-7次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2丁目2-28
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1986年11月18日～19日
- ・調査面積 12m<sup>2</sup> / 154m<sup>2</sup>

86-7次調査地は、86-6次調査地の東側に接して位置する。2.5m × 5m の東西方向の調査区を設定し、掘り下げていったが、86-6次調査地と同様に、瓦礫を含んだ盛土下で地山に至り、遺物包含層は認められない。地山は、東端で地表下40cm、西端で地表下60cmを測り、やはり、西側へ緩やかに傾斜している。

遺構は、地山上面でピットを6個確認した。

ピット-1は、80cm × 60cm以上の隅丸方形平面を呈する。深さは26cmを残す。柱の推定直径は20cm。掘方内からは、土師器小片とサヌカイトの微細な剝片多数が出土しており、底面近くからサヌカイト製の石鏡が1点出土している。

ピット-2は、72cm × 56cmの隅丸方形平面を呈する。柱の直径は20cmと推定される。保存可能なため、掘方内は完掘していない。遺物は、須恵器、土師器、サヌカイト片が出土しているが時期は不明。

ピット-3は、44cm以上 × 40cmの規模の隅丸方形平面を呈する。やはり、柱の推定直径は、20cmを測る。須恵器、サヌカイト片が出土している。

ピット-4は、32cm × 28cmの方形平面を呈し、柱の直径は、14cm前後である。土師器小片が少量出土している。

ピット-5は、一辺28cmの方形平面を呈する。

ピット-6は、直徑26cmの円形平面を呈し、

ピット-5を切っている。

ピット内からは、いずれも少量の遺物を出土しているのみであり、時期の決定できる遺物は見られない。しかし、盛土内から出土している須恵器(1)、土師器(2)は、8世紀代の遺物であり、遺構も同時期と考えられる。また、ピット-1～3は、柱の位置がややずれるが、ほぼ直角をなし、掘立柱建物の一部を構成すると考えられる。各ピット間の距離は、250cmと140cmである。

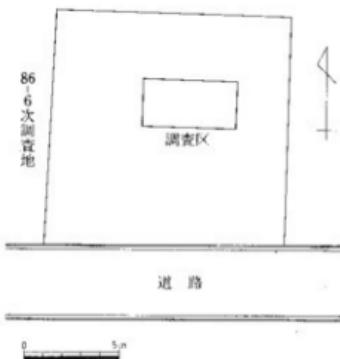


図-43 調査区位置図

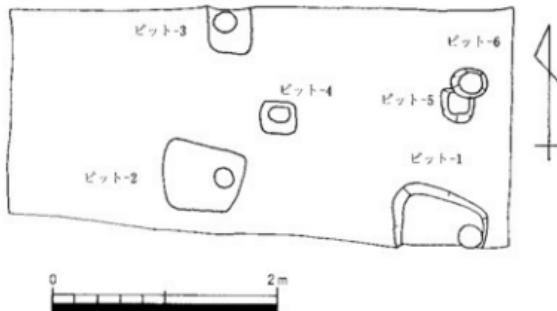


図-44 遺構平面図

遺物は、須恵器、土師器、屋瓦、サスカイトが出土している。須恵器杯蓋(1)は、扁平なつまみを有し、蓋内面のかえりはみられない。土師器杯(2)は、器高が低く、口縁部は弱く外反する。器表面の剥離が著しく、調整は不明である。(3)は、瓦質であるが、用途不明である。厚さは2.2cmを測り、表面に直径4cm、高さ1.7cmの円形突起がみられる。その横にも、表面が円形に欠けている部分がみられ、同様の円形突起が存在したものと思える。2個所の円形突起の間隔は、約6cmである。器表面の調整は、表面が10本/cmのハケメ、裏面がユビナデである。円形突起はナデ調整を施す。淡灰色を呈し、焼成は良好、胎土には石英・長石等の砂粒を含む。胎土・焼成は屋瓦と全く同一である。円形突起の状態から、鬼瓦の周縁部分の可能性が考えられる。屋瓦は、他に平瓦が1点みられるのみである。

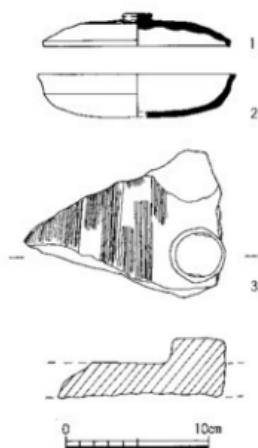


図-45 出土遺物

石鐵は、サスカイト製の四基無茎式である。一部を欠いており、全体に風化がみられ、リング等は明瞭でない。弥生時代前期の石鐵であろう。ピット-1から出土しており、原位置を留めない。

86-6次調査と同様に、サスカイト原石や剝片がコンテナ箱に1箱程度出土している。特に、ピット-1からは、石鐵と共に微細な剝片が多数出土しており、調査地周辺に石器の工房跡が存在したと考えられる。

今回の調査に限らず、過去の調査でも、かなり広範囲からサスカイトが出土しており、今後の調査が注目される。

86-7次調査でも、建物基礎深度は浅いため、遺構は保存できる。

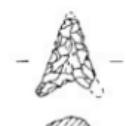


図-46 石鐵

## 第5章 国分尼寺跡

### 86-2次調査

- ・調査地所在地 柏原市国分東条町2577-1
- ・調査期間 1986年10月13日・10月14日
- ・調査面積 7m<sup>2</sup> / 296m<sup>2</sup>
- ・調査担当者 石田成年

### 調査概要

光洋精工第2工場周辺、特にその東方には「尼寺」の地籍名が残り、河内国分尼寺がこの附近に造営されたと推される。調査対象地は、国分尼寺推定地のほぼ中心にあたる。周辺地の地形は南に明神山系から西北へ派生する尾根をひかえ、西方、北方には田辺から芝山へと続く丘陵がめぐり、それらに囲繞されたこの平坦地は小さな盆地状の地形を呈している。

調査は対象地の中央西寄りに一辺2.5mの調査区を設定し、建物基礎深度が浅いことから人力により現地表下約0.9mまで掘削した。

層序は上から黒褐色土(表土・耕土)、灰褐色粘質土、灰色粘質土、茶灰色粘質土、橙白色粘質土、灰色粘質土であり、何れも厚さ15~20cmで水平に堆積していた。各層ごとに造構の検出に



図-47 調査地位置図(方位は真北)



図-48 調査区位置図

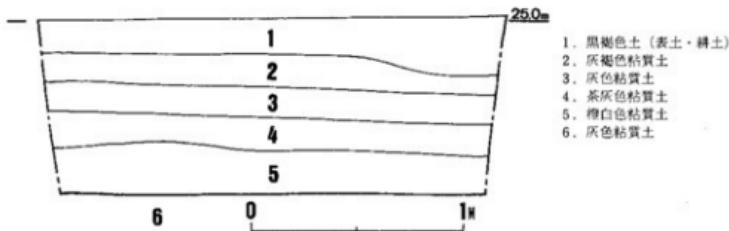


図-49 調査区北壁断面土層図

努めたが、全く認められなかった。

遺物は第2層の灰褐色粘質土層以下、何れの層においても須恵器、土師器、瓦が含まれていた。図示したものは軒丸瓦1点(図-50)のみで、他は破片である為、図化できない。半瓦については凸面に4本/cmの縄叩き目が、凹面には7~8本/cmの布目痕がそれぞれ認められた。軒丸瓦は中央に珠点をもつ3重圓文軒丸瓦で、瓦当径15.3cmをはかる。色調は明茶灰色を呈し、胎土は3mm程度の石英がやや目立つものの、総じて精良で、焼成はやや軟質である。丸瓦との接合方法は「印籠つぎ」である。時期は8世紀前半であろう。

当該地から東北100mの地点に83-1次調査地があり、8世紀前葉に位置づけられる複弁8葉蓮華文軒丸瓦の出土があった。<sup>11)</sup>諸[山]國分寺、國分尼寺の造営が天平13年(741)の聖武天皇の詔勅直後に開始されたとしても、河内國分寺、國分尼寺において、このようにそれ以前に廻る瓦の出土がみられることは興味深い事実である。

#### 註

- (1) 桑野一幸「國分尼寺跡」「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1983年度」  
柏原市教育委員会  
1984年

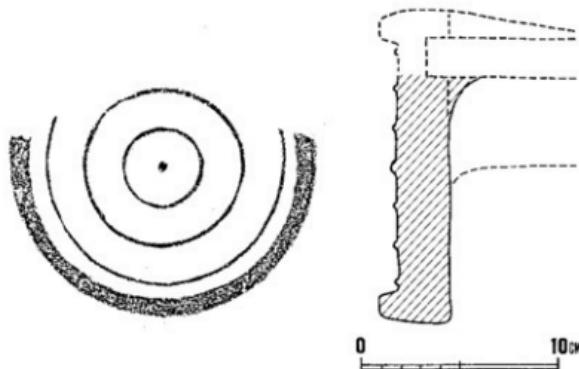


図-50 出土軒丸瓦

## 付章 船 橋 遺 跡

昨年度に引き続き、今年度も船橋遺跡大和川川床地区の巡回パトロール、遺物表面採集、測量図の作製等を実施した。川床削平の大きな要因となる集中豪雨による大和川の増水は今年度は少なかったものの、今なお年平均1m程度の割合で川岸が後退し、遺構、遺物が流失している。河内橋の東約120mの地点では一辺125cm、深さ150cm以上の井戸の検出があった。確認後、実測図作製等の準備に入ったが、間もなく川の増水があり、井戸枠が流失し半壊状態になった。また盗掘も受け、井戸枠の一部を持ち去られるという事態もあり、原況は著しく損なわれている。遺跡全体における盗掘も依然とどまることなく行なわれており、特に雨上がりにそれが激しく、ボーリング棒状のものでついたのであろうか、削られた断面に直径1cm程度の穴が無数にあけられている。また、盗掘した遺物を選別し、不用のものを排棄したような形跡もみられ、ますますエスカレートしてくる盗掘の状況に目をおおうばかりである。遺物はその出土地点、出土状況等が正確に記録されてこそ一級資料としての価値や特質が見い出されるのであって、無意味な盗掘は遺物、遺構の性格だけでなく、ひいては僅かながらも歴史をも消してしまう恐れがあり、厳に慎まなければならない行為である。一部の興味本位の蒐集家に私蔵され、整理、公開がなされていないのも憂慮されよう。

当該遺跡が破壊、消滅の危機から免かれれるよう、一刻も早く保護、保存の措置が講じられるよう努力していくなければならない。川床という遺跡の立地条件の悪さから極めて困難な様相を呈しているが、巡回パトロール、表面採集、測量図作製という小さな1歩がその繰り返しにより、大きな1歩となるようあらゆる面で敵に対処していきたい。

以下、今年度の主な表採遺物を実測図、図版で紹介する。

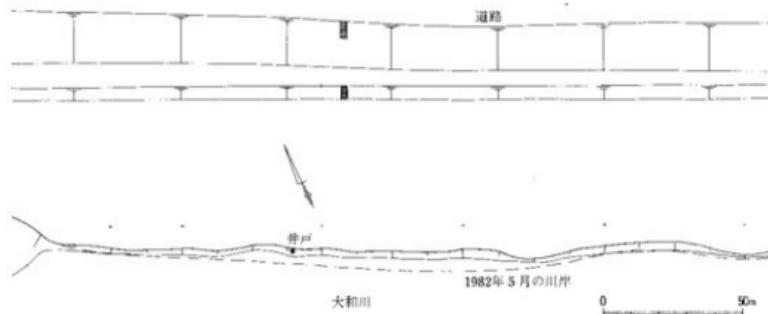


図-51 平板測量図(1987年3月現在)

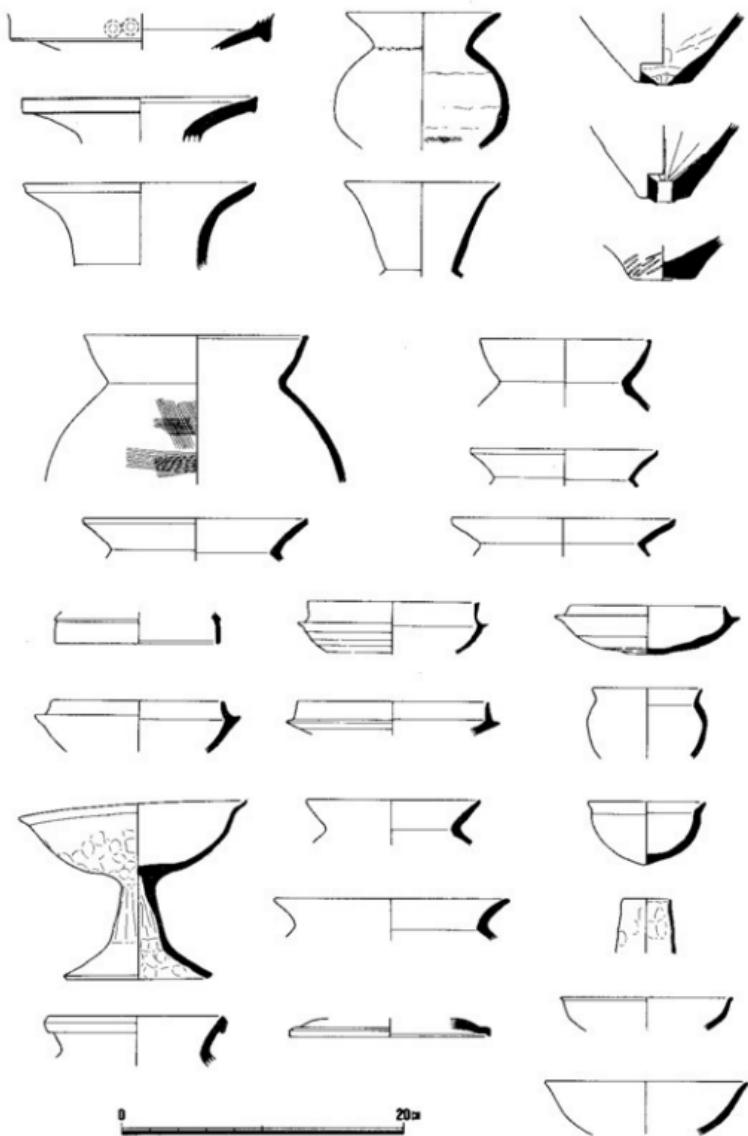


図-52 表採遺物(1)

船橋遺跡

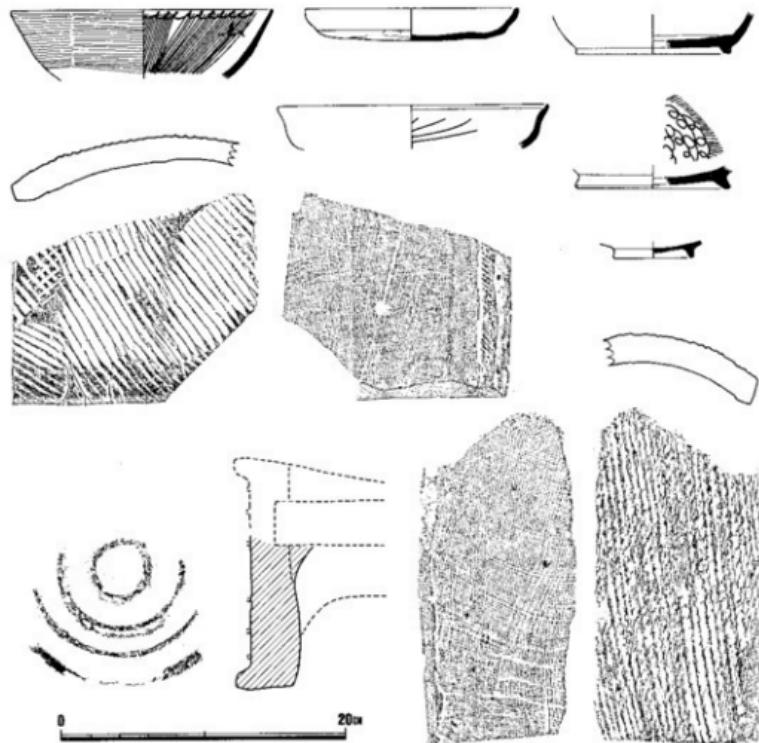
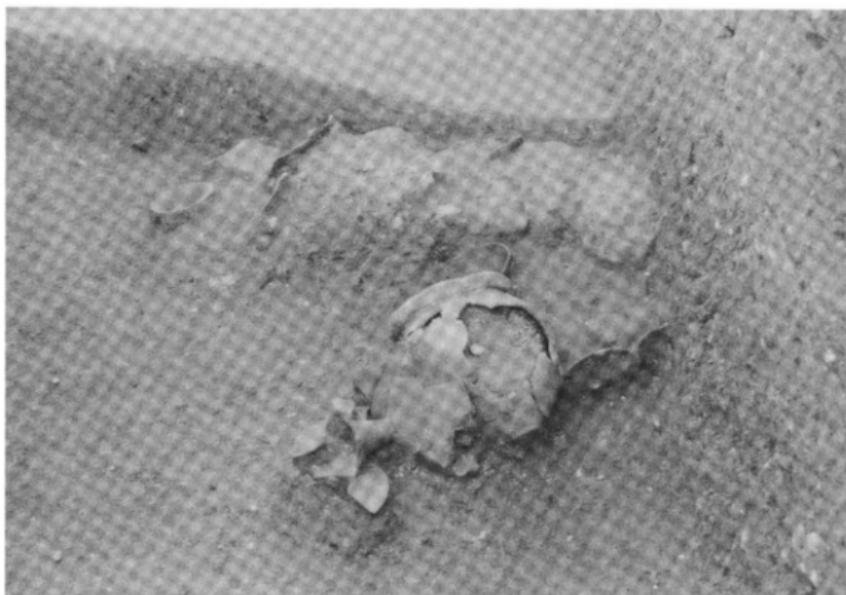


图-53 表探遗物(2)

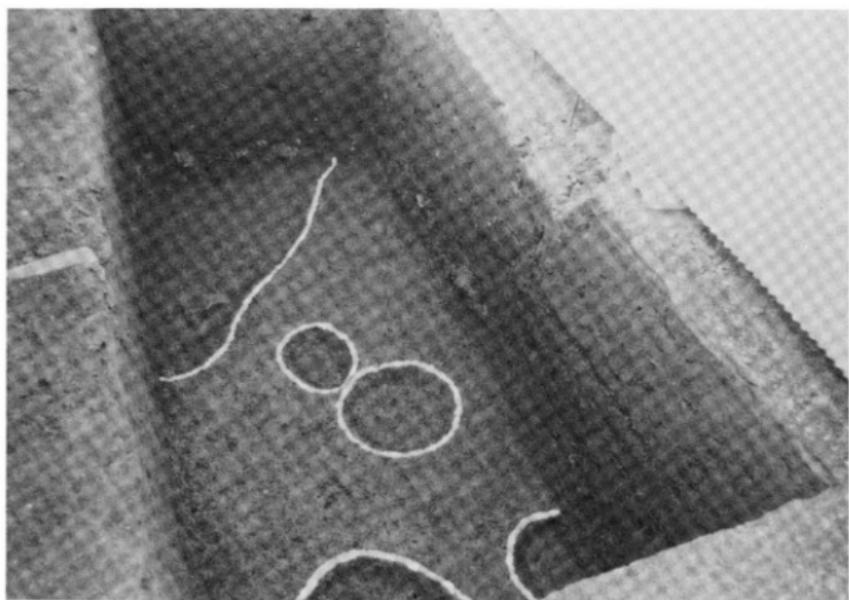
# 図 版



第1 トレンチ堅穴住居



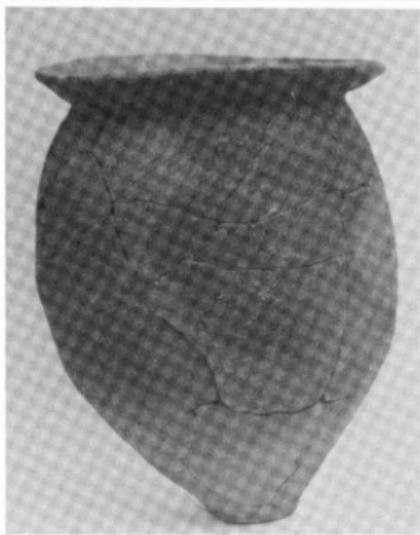
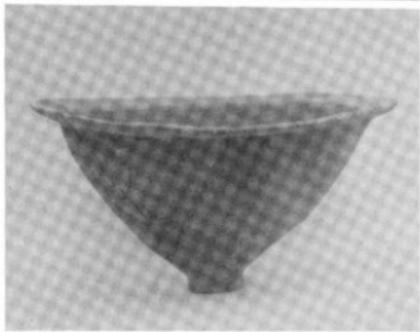
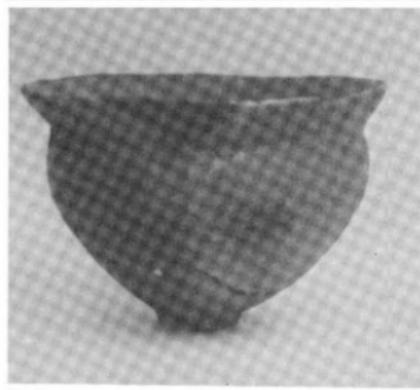
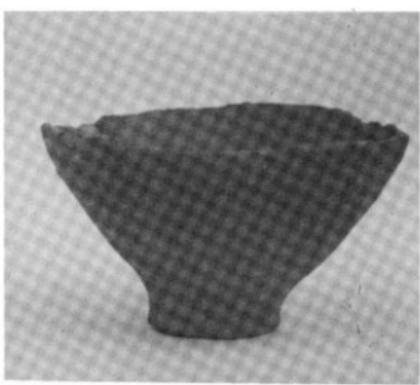
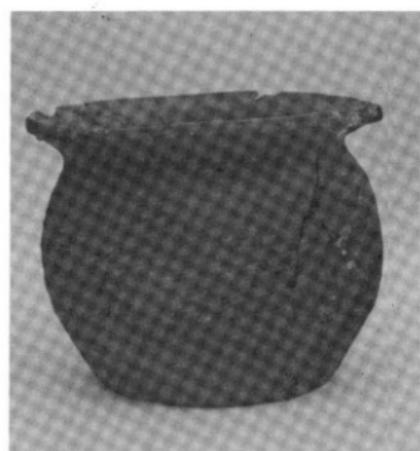
第1 トレンチ遺物出土状況



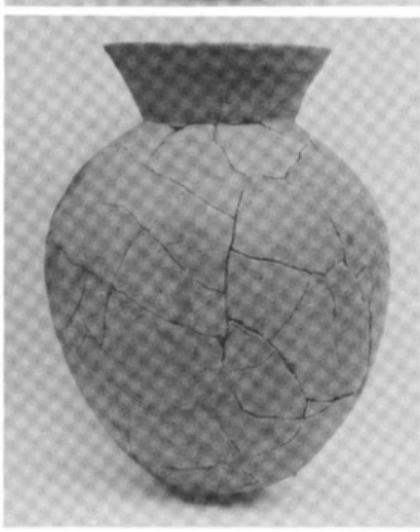
第2トレンチピット群



第2トレンチ断面

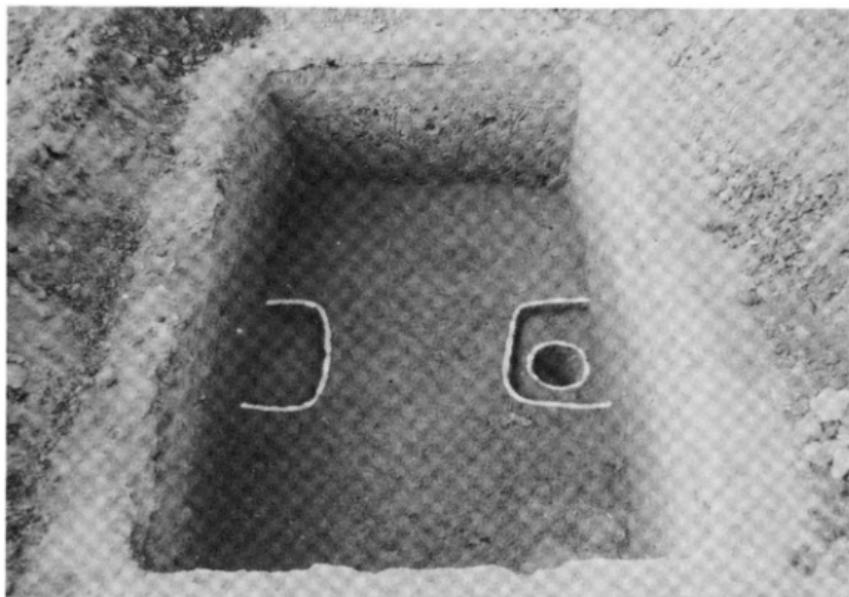


竪穴住居出土遺物

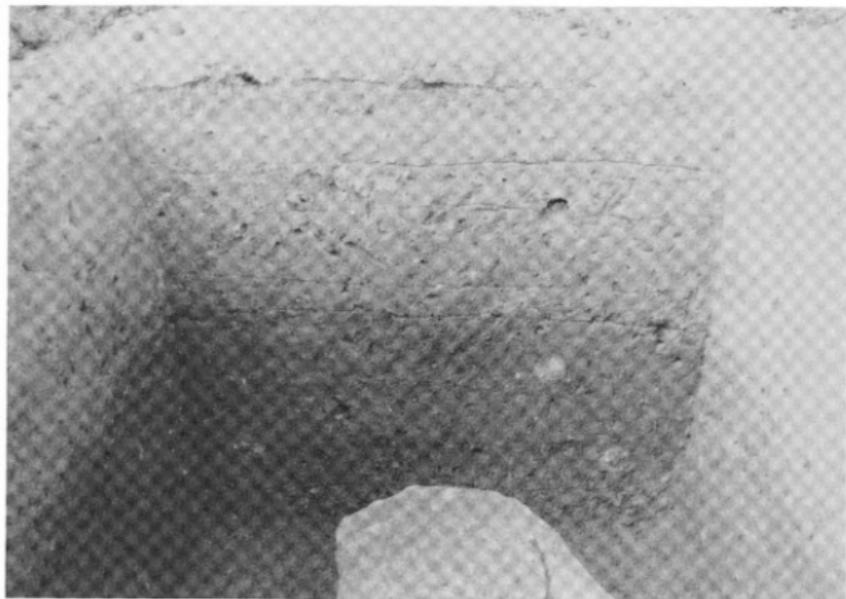




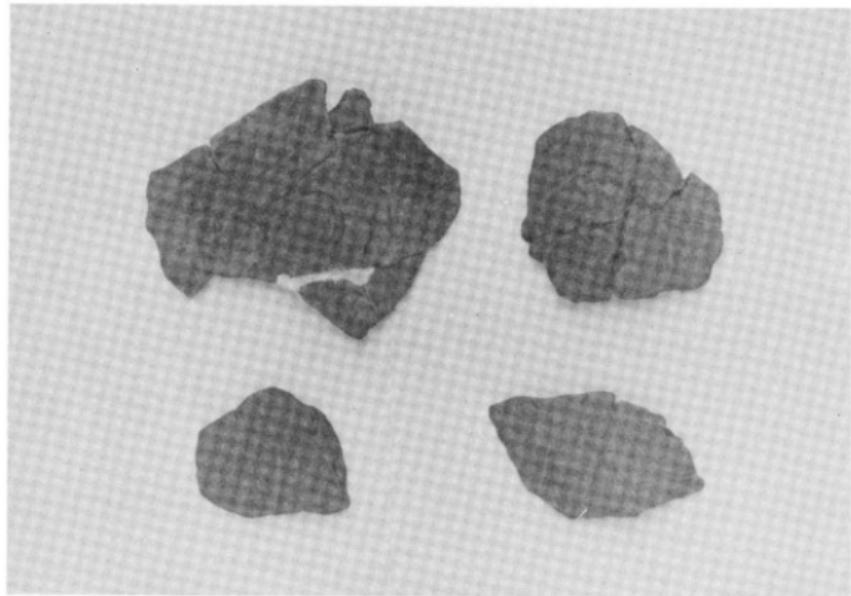
第1 トレンチ



第1 トレンチ



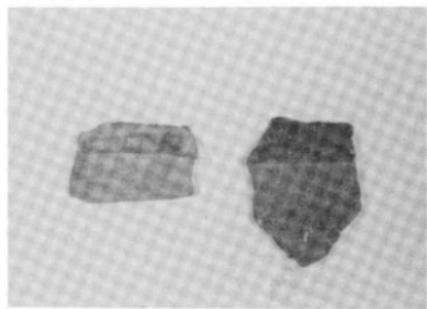
第2 トレンチ断面



出土遺物



西辺調査区（南から）



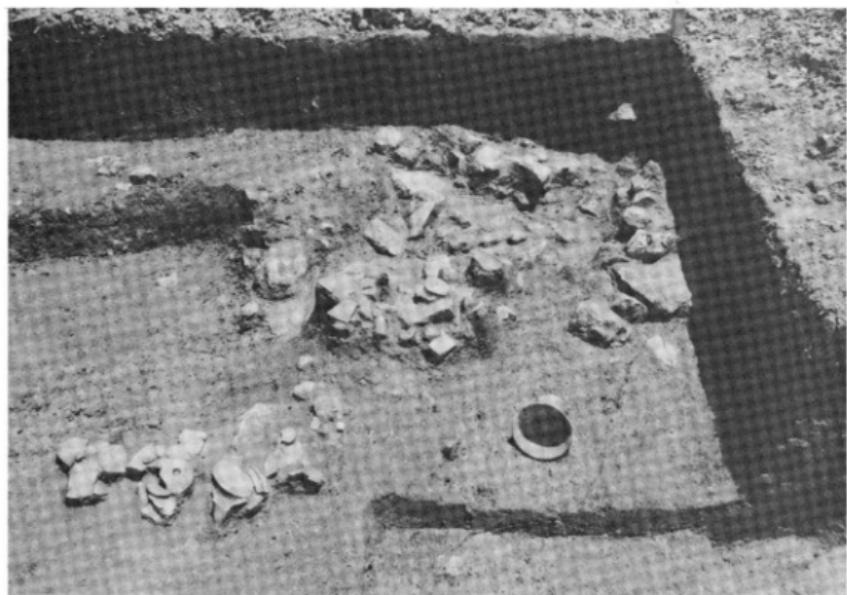
出土遺物



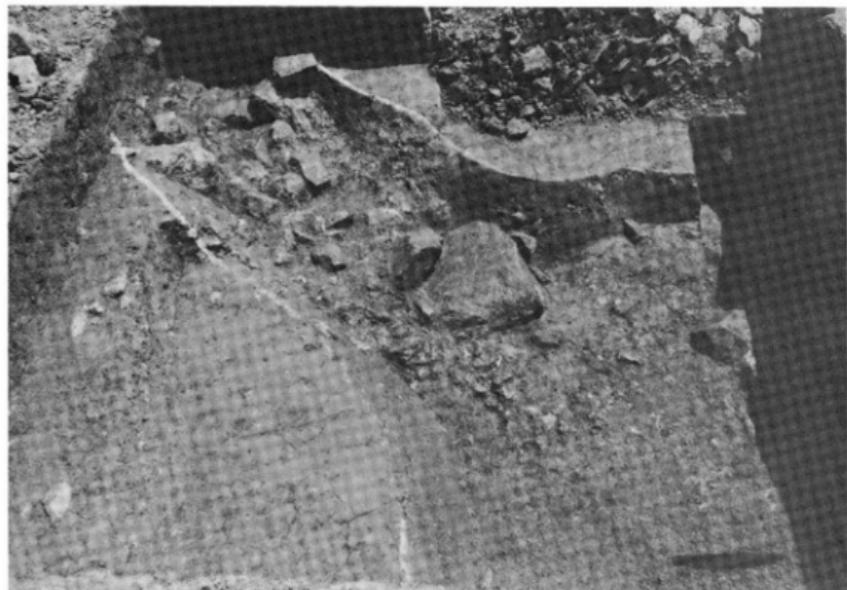
調査地近景



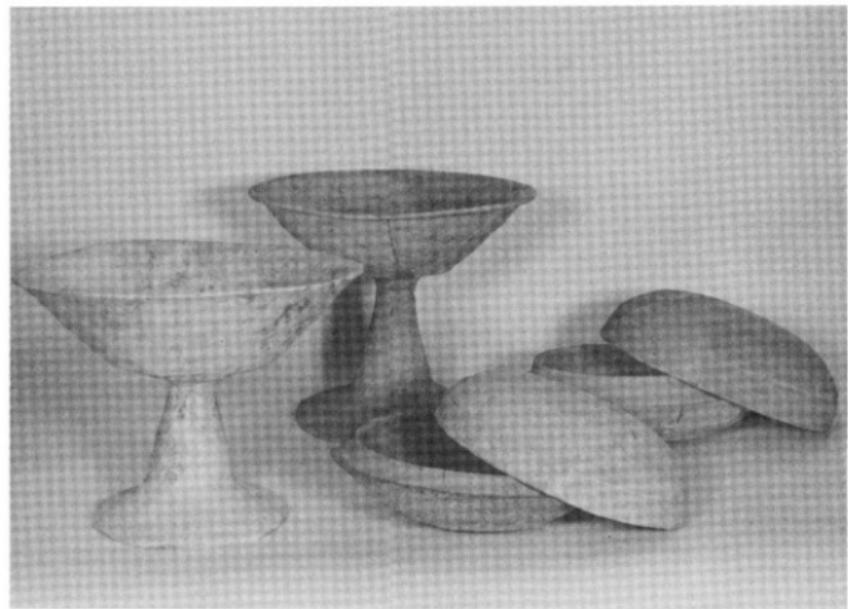
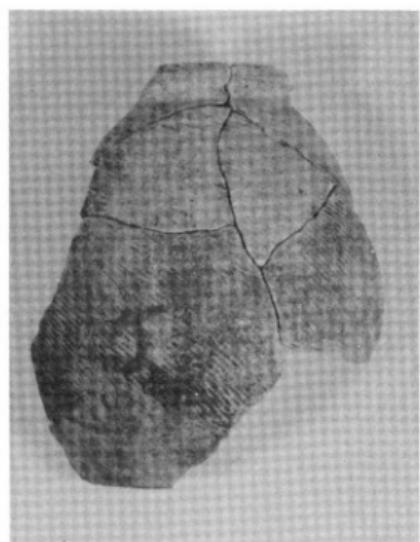
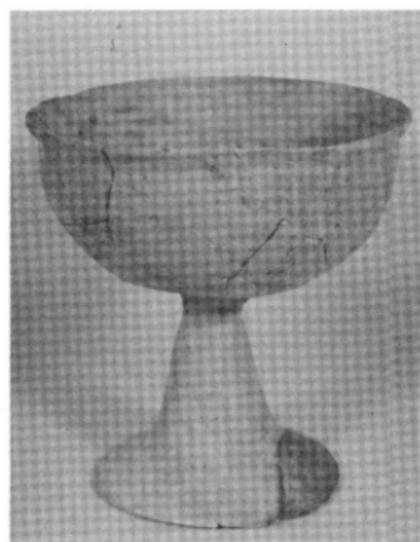
溝 検出時（南西から）



溝（西から）



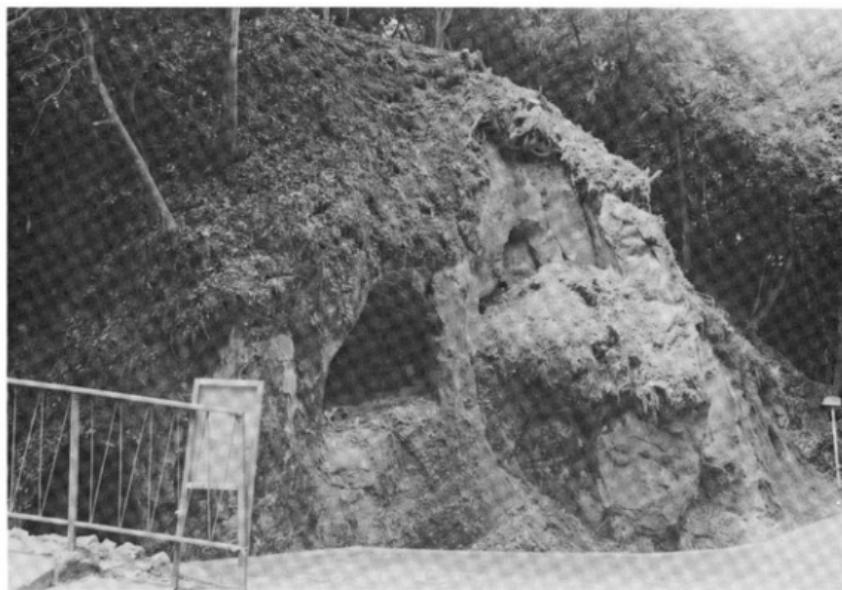
溝 底部（北から）



出土遺物



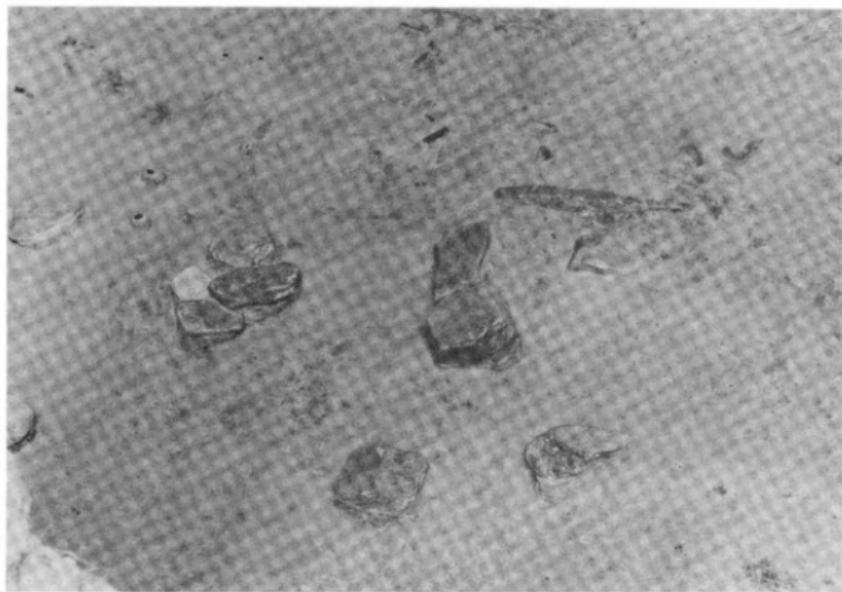
樹木伐採後（西から）



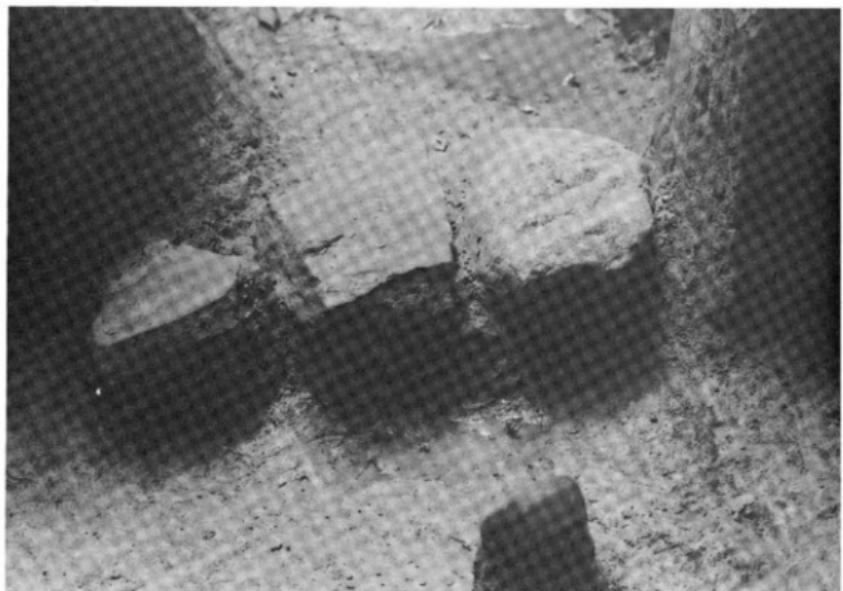
樹木伐採後（東から）



狭道から玄室を見る



棺台と遺物出土状態



玄門の閉塞石



天井・側壁境の切り込み段



1



2



3



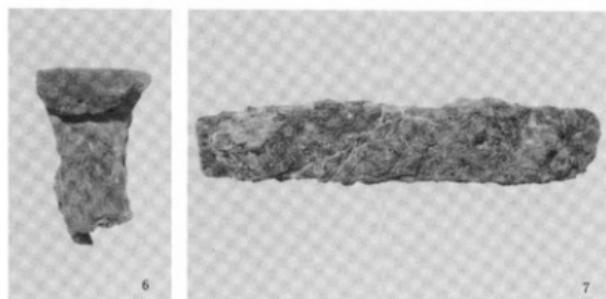
4



5



6

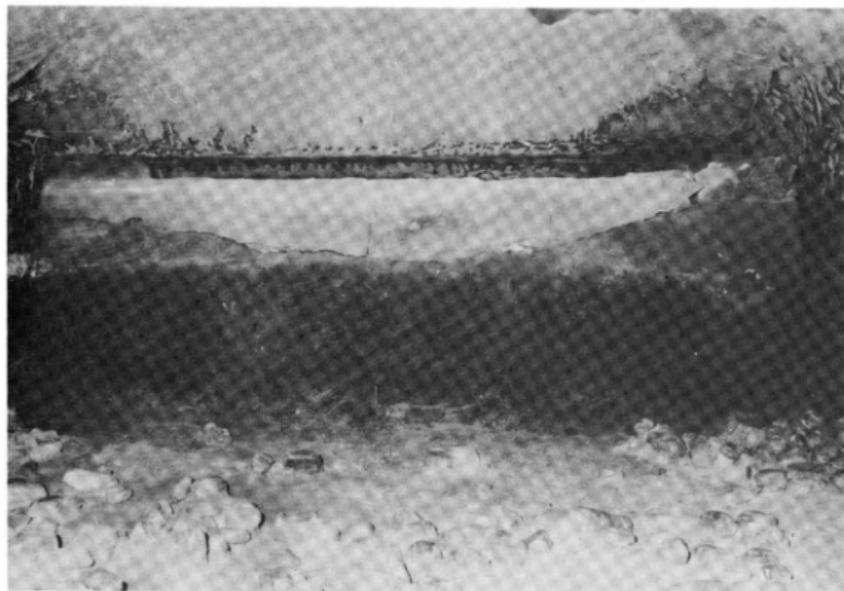


7

1 土師器，2・3 須惠器，4 瓦，5 素玉，6 金具，7 錄，8 刀

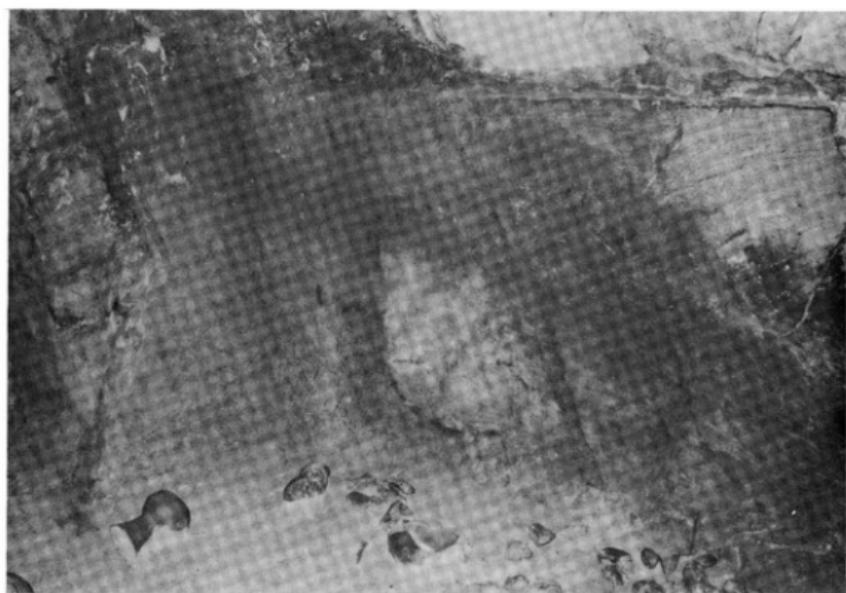


南群18号横穴調査風景

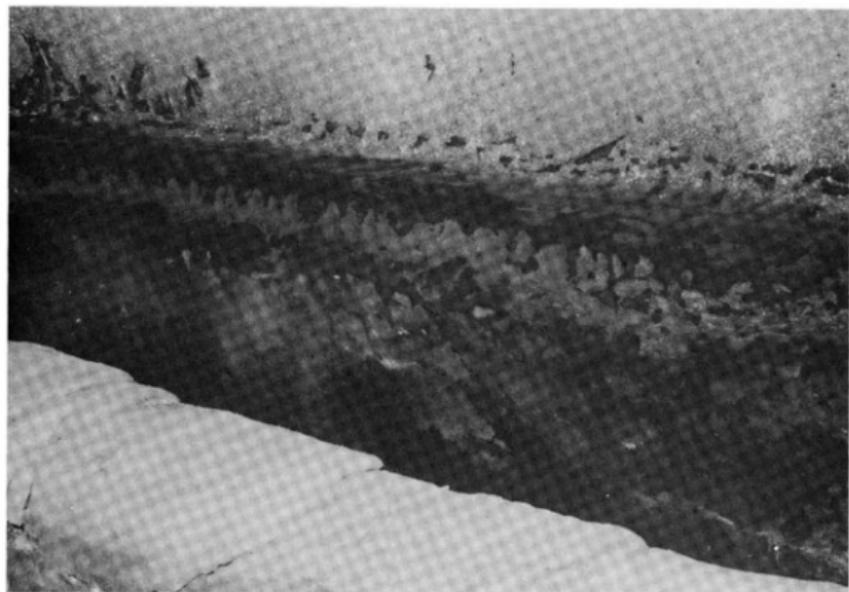


造り付け石棺と床面の小礫敷き

図版一六 安福寺横穴群 南群18号横穴



左袖壁、左側壁境の出張り



造り付け石棺内面

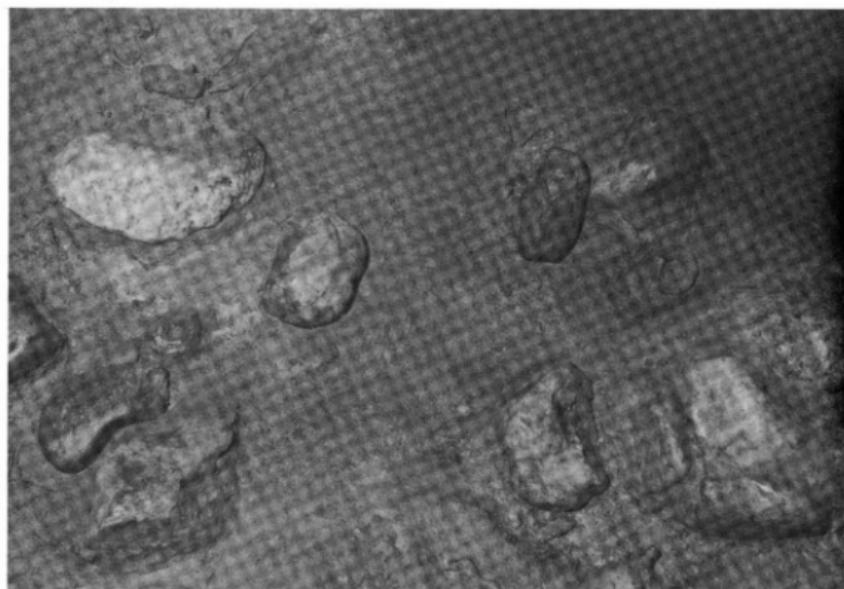
図版一七 安福寺横穴群  
南群18号横穴



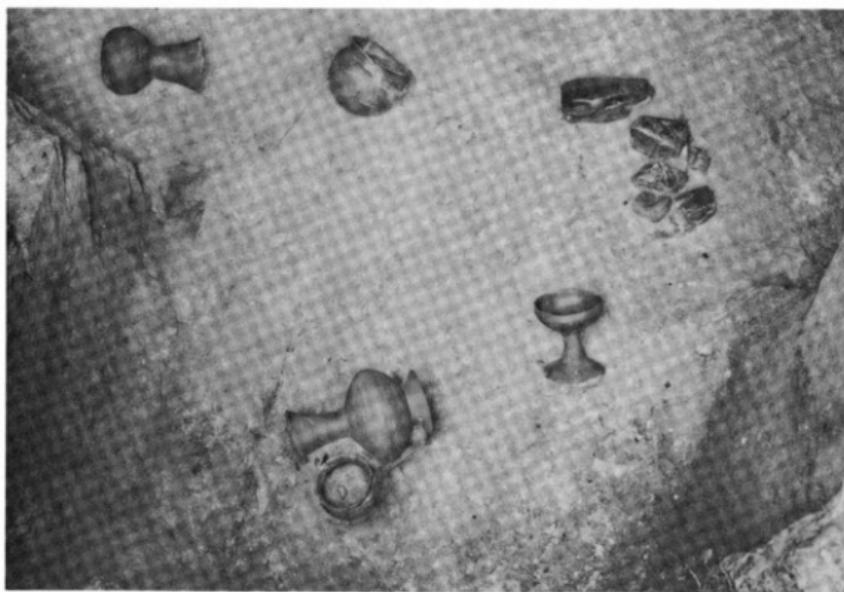
左侧壁～石棺前面



右侧壁～石棺前面



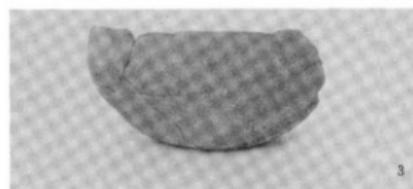
銀環の出土状態



玄門～羨道部の遺物出土状態



2



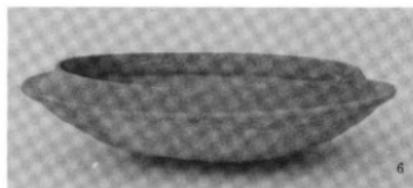
3



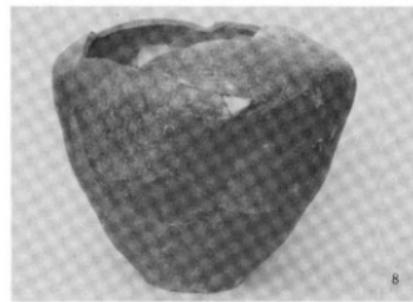
4



5



6



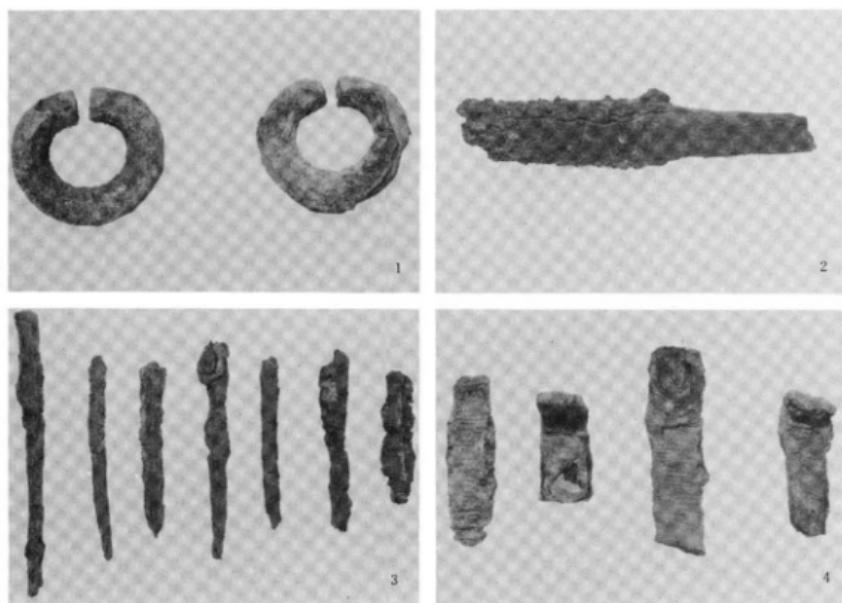
8



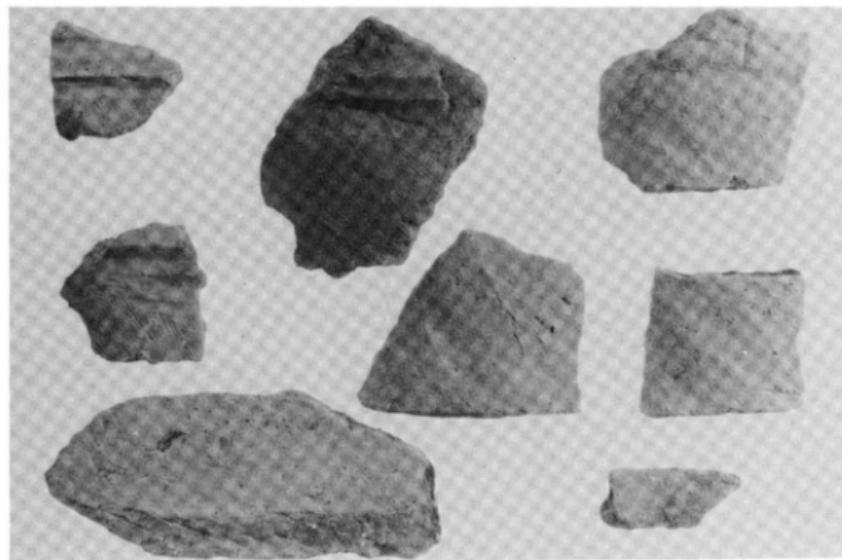
7

1～5 土師器, 6・7 須恵器, 8 常滑焼

圖版二〇 安福寺橫穴群  
南群18号横穴・南群斜面



1 銀環，2 刀子，3 釘，4 錠



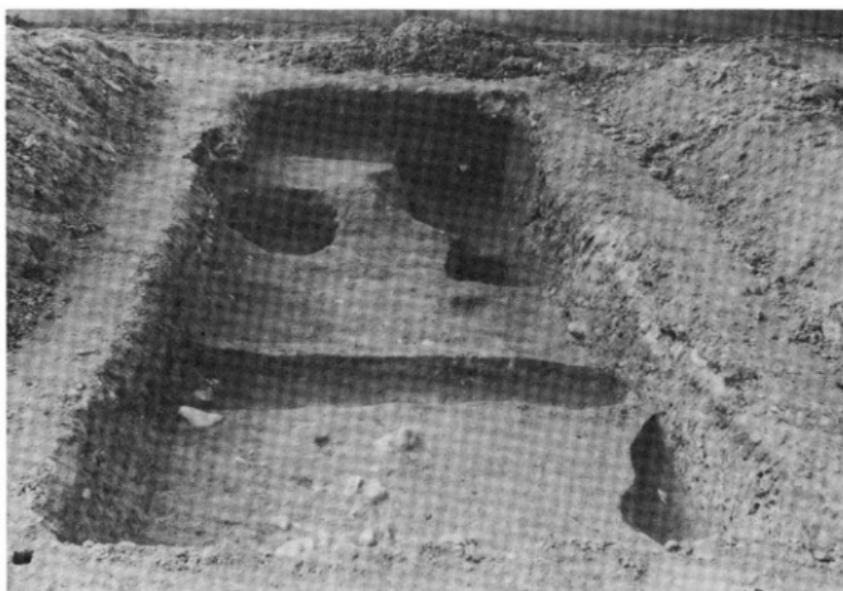
上・中 円筒埴輪，下 形象埴輪



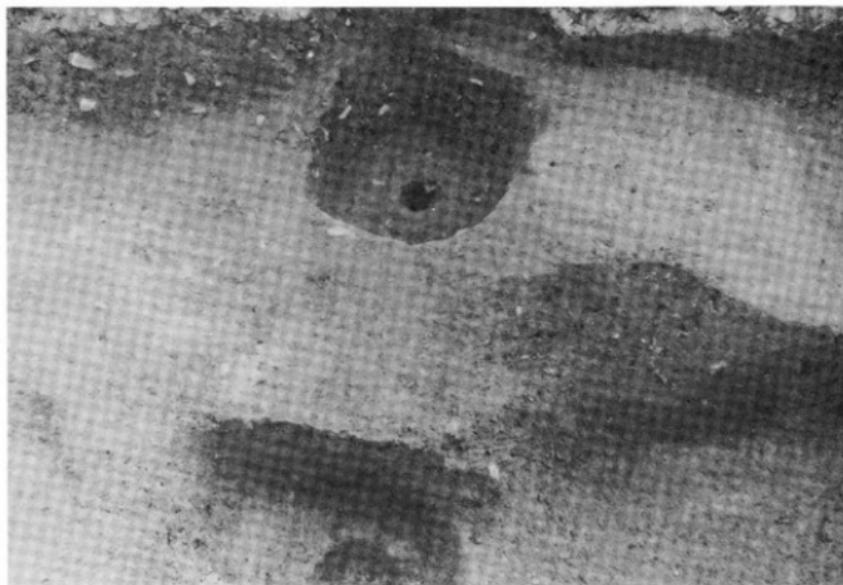
1区（西北から）



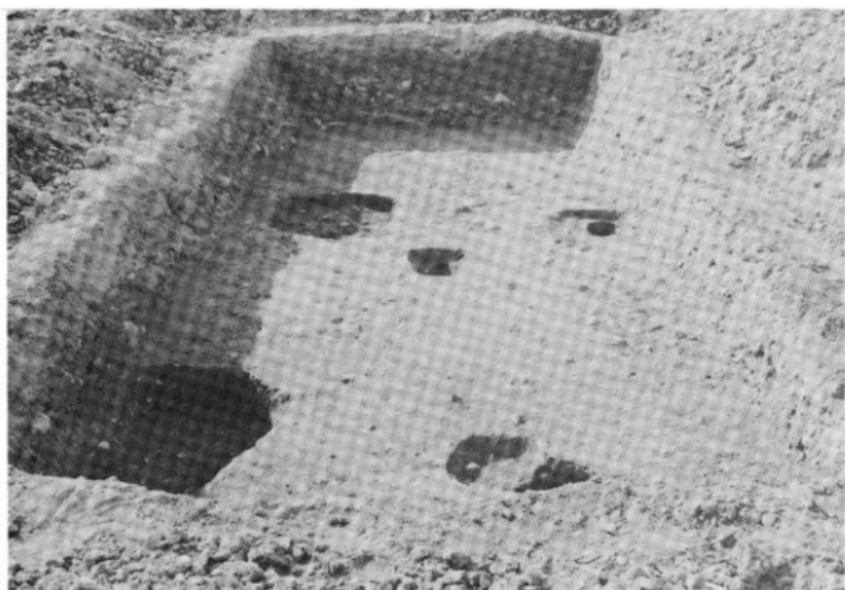
同（南から）



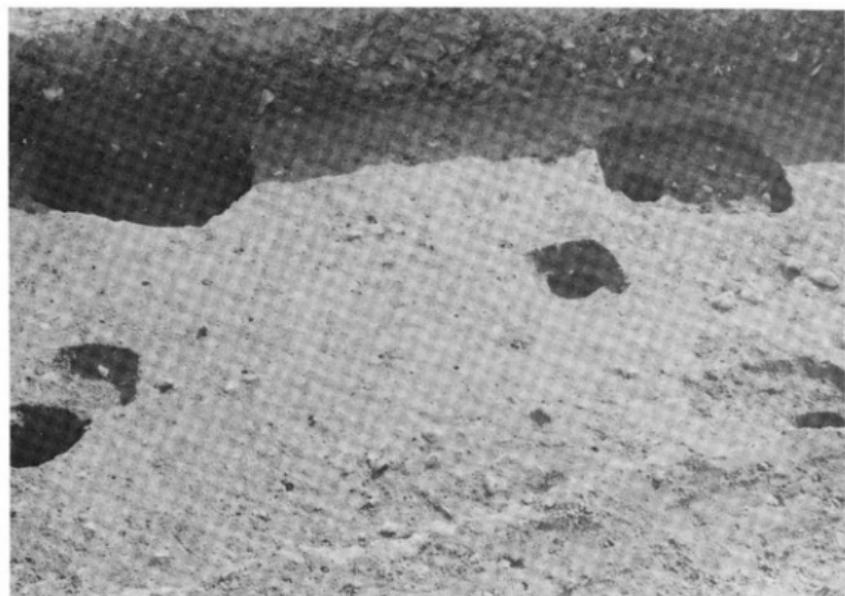
全景（東から）



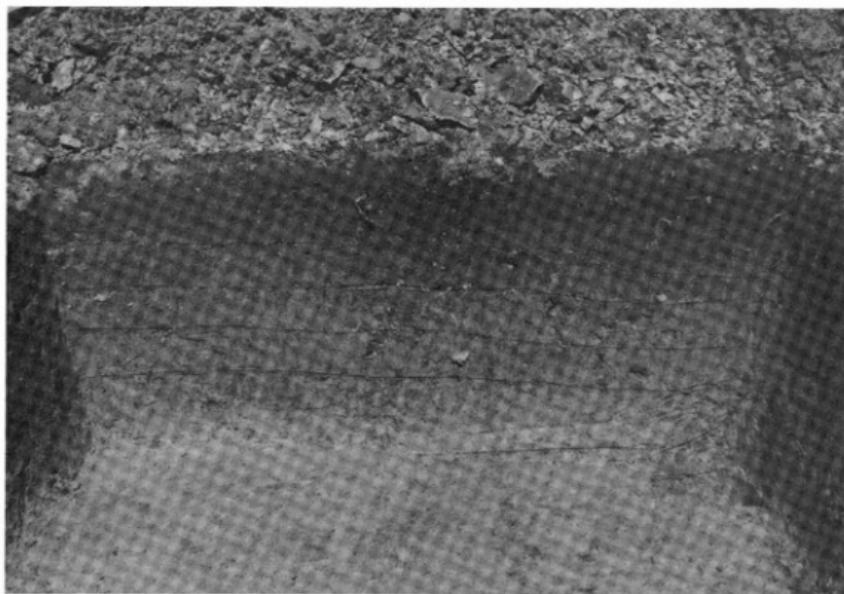
遺構（北から）



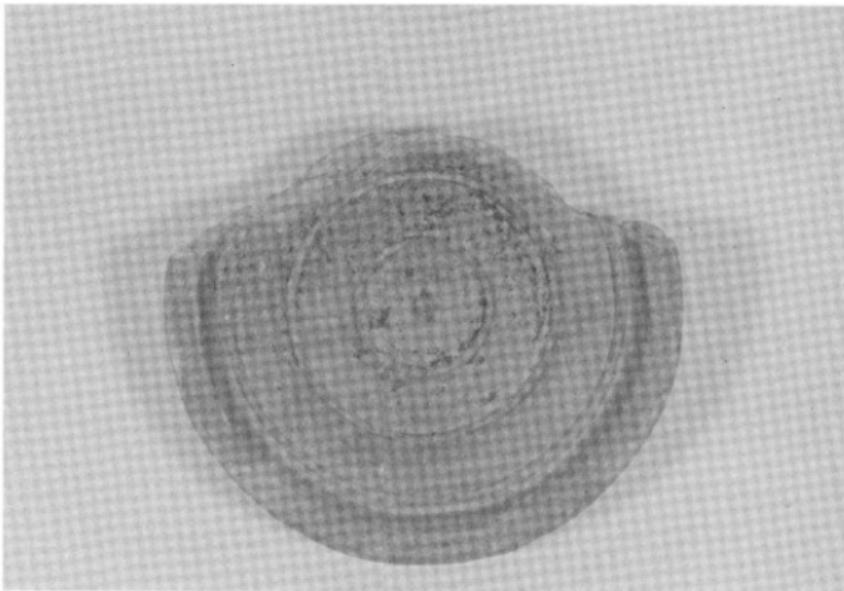
全景（東から）



遺構（北から）



調査区北壁



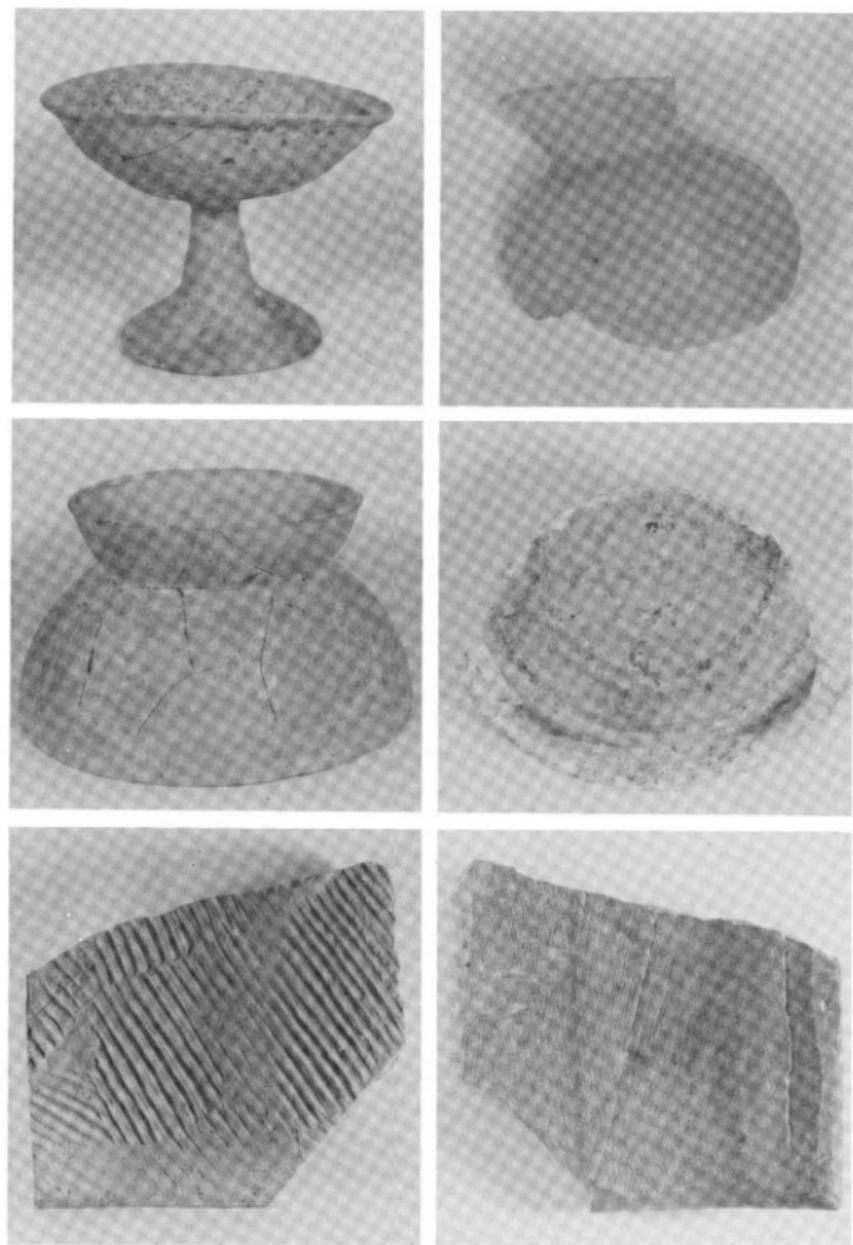
出土軒丸瓦



川床地区 現況（西から）



井戸（西から）



表採造物

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1986年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1 番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

